

『昭和虞美人草』(二幕)

マキノノゾミ
作

●登場人物（登場順）

- 甲野（欽吾）…………… ロック雑誌『エピタフ』の主宰者
- 宗近（一）…………… 『エピタフ』同人 甲野の盟友
- 光江…………… 甲野家のお手伝い
- 浅井（孝之）…………… 『エピタフ』同人 京都時代は小野と同級生
- 小野（清三）…………… 『エピタフ』同人 京都育ち 東大卒
- 藤尾…………… 甲野家の令嬢 欽吾の妹 志津子の実子
- 大吾…………… 代議士 欽吾の父
- 志津子…………… 大吾の妻 欽吾の継母
- 糸子…………… 宗近の妹 写植オペレーター兼デザイナー
- 小夜子…………… 小野の庇護者・金山の娘 高校時代の小野の恋人

●場所

東京 代議士・甲野大吾氏の屋敷 その書齋

●時間

- プロローグ 昭和四十一年（一九六六）の七月
- 一幕一場 昭和四十八年（一九七三）の一月初めの午後
- 二場 同年三月の終り うららかな午前十一時頃
- 二幕一場 同年七月初めの午後
- 二場 二週間後 七月下旬の夕刻
- 三場 四か月後 十一月半ばの夜の八時過ぎ

「第一幕」

東京。代議士・甲野大吾氏の屋敷。その書斎。

戦前に建てられた南向きの洋風の部屋。上手側のフランス式窓は中庭に面して出入りができる。窓の横、上手手前にライティングデスク。

舞台奥正面に暖炉があり、中にガストーブが据えてある。暖炉の横の戸口は内廊下で、戦後に建て替えられた母屋から続く。

戸口の上部には静物画が掛かっており、壁一面の立派な書棚は古今東西の書物で埋まっている。下手側手前の戸口を開ければ古い応接室へと直に続く（中は見えない）。部屋中央にはテーブルと椅子が四脚。その他、下手辺りにトルコ風の寝椅子など。

プロローグ

この書斎と応接室はしばらく使われていない様子で、調度類にはすべて白い布が掛けてある。澱んだ空気を入れ替えるために、今は窓も戸口も開け放たれており、時おり風が渡る。

今は昭和四十一年（一九六六）の七月。

戸外で盛んに蝉の声。遠くでかすかに鳴るラジオが聴こえる。例えばザ・サベージの『いつまでもいつまでも』のメロディが、途切れ途切れに風に運ばれてくる。

舞台奥の戸口から二人の少年が入ってくる。夏服姿の高校生、甲野欽吾と宗近一。甲野は黒縁の眼鏡を掛け、父親の肖像画を抱えている。

宗近は踏台を抱えている。二人は戸口の下に踏台を置き、上に掛かっていた古い静物画を外して新しい肖像画へと掛け替える作業に取りかかる。

甲野 (掛け替えた絵の角度を調整して) こんなもんか？

宗近 ちよつと歪んでる。こつちがもうちよいこつ。 (と角度をゼスチャー)

甲野 こう？ (と直す)

宗近 オツケー。

甲野、踏台から降りて、宗近と一緒に絵を見上げる。

甲野 うん。ま、こんなもんか。

宗近 しかしおじさんも意外と俗物だな。こんなの描かせるなんて。

甲野 知り合いの画家がお金に困ってたんだってさ。

宗近 だから描かせたの？

甲野 直にお金を差し上げるんじや失礼だからって。

宗近 ふーん。そういうもんか。

甲野 絶対嘘だと思う。

宗近 え？

甲野 自分もこういうの残したかったんだよ、明治の元勳みたいに。

宗近 何だよ、やつぱりそうじゃんか。

甲野 そ、度しがたき俗物ですよ。でも仕方ないんだ。ここに飾っとくの

が条件だから。

宗近 この絵で甲野を見張るつもりなんだろうな。

甲野 目の所に小型カメラ付いてたりして。

宗近 ジェームス・ボンドかよ。

二人は笑い合う。

宗近 でもこの部屋いいよな。親にも干渉されないし。ね、今度ここで麻雀大会やろうよ。みんなでLP持ち寄ってさ。ビートルズなんかガンガンかけてさ。

甲野 俺はもう遊べないよ。

宗近 何で？

甲野 結局一学期まるまる遊んじまったし。

宗近 それはしょうがないよ、ビートルズだって来たしさ。

甲野 とにかく夏休みから始めるって決めてたから。

宗近 えーだってまだ一年半もあるじゃん。受験勉強なんて俺はまだ全然したくないけどなあ。

甲野 宗近さ。そんなこと言っていると大人になれないぜ。

宗近 受験勉強って大人になるためにするのか？

甲野 そうだよ。もはや一種のイニシエーションなんだよ、あれは。

甲野はポケットからハイライトを取り出して一本啣え、宗近に差し出

す。宗近も一本啜えて甲野に返す。甲野、マッチで火を付け、宗近のにも点けてやり、部屋の隅に隠してあった灰皿を取り出す。

二人はぶうつと煙を吐く。

宗近　じゃ聞くけどさ。人間って何のために大人になるんだよ。

甲野　何のため？

宗近　恋愛して、セックスして、子ども作って、そうやって自分の子孫を残すためなら、そんなの受験勉強しなくたってできるぞ。

甲野　あのな、生物学的に成体になったからって、そういうのは大人とは言わないの。

宗近　じゃどんなのが大人だよ。

甲野　そうだな——（と考えて）あえて言えば、人間の分子のうちの第一義が活動するのが真の大人さ。

宗近　何だそりゃ。全然わかんないよ。

甲野　漱石がそう言ってるんだ。『虞美人草』の中で。

宗近　漱石って『坊っちゃん』しか読んだことないよ。人間の分子の第一義って何？

甲野　それは例えば——そう、ビートルズだよ。彼らの音楽はまさに人間の分子の第一義的活動と言える。

宗近　ビートルズが？

甲野　つまりさ、彼らの中にだっているんな分子があるわけじゃんか。スターになりたいとか、お金が欲しいとか、女の子にモテたいとか、あ

と税金あんまり払いたくないとか。

宗近 ビートルズも税金払ってるのか。

甲野 当たり前じゃんか。ものすごい額を払ってるぞきつと。だから勲章もらったんだから。

宗近 ああ。あれはそういうことか。

甲野 でもな、そんなのは全部どうだっていいんだ。彼らの中にはたまたまものすごい音楽の才能があつて、それだけが彼らの第一義なんだよ。だから自ら作曲して、演奏して、歌う——つまり彼らの音楽は、あれは彼らの分子の第一義が活動してるってことなんだ。

宗近 なるほど。

甲野 そんなふうに人間の分子の第一義が盛んに活動するとどうなるか。

宗近 ? どうなるの?

甲野 端的に言えば、世界は幸せになる。ビートルズがいい例だな。

宗近 じゃあさ、世界を幸せにするのが大人ってこと?

甲野 まあそういうことになるな。

宗近 でもそんなの大変じゃんか。

甲野 大人になるっていうのは大変なことなんだよ。

と、廊下の奥から「欽吾さん? どこなの?」という継母の声がする。

甲野 やへ。

二人は大慌てで煙草を消し、灰皿を隠す。

母の声 欽吾さん？ どこ？（と廊下を近づいてくる）

甲野 （戸口から廊下に顔を出し）ここだよ、なに？

母の声 ジュースとカステラ。こっちで食べる？

甲野 いいよ、そっちに行くから。

母の声 じゃ早くいらっしやい。一さんも。

宗近 （廊下に）はい。

甲野 （継母が去るのを確かめ、宗近に）セーフ。

宗近 007危機一髪。

二人、笑い合う。

甲野 ところでさ、『ペーパーバックライター』ってどう考えてもB面の方がすくなくないか？

宗近 ああ『レイン』？

甲野 食べたなら聴こうぜ。今日が最後だ。ビートルズのレコード順番に全部聴こうよ。

宗近 うん。（出て行きかける甲野に）なあ。

甲野 なに？（とふり向く）

宗近 じゃ、甲野も世界を幸せにしたいわけか？

甲野 そりゃそうさ。いつかはね。

宗 近

そうかあ。(と感じ入って)すごいなおまえ。

ビートルズの『レイン』とともに急速な暗転。

1

昭和四十八年(一九七三)一月の初めの午後。

戸口の上部には甲野代議士の肖像が変わらず印象的に掛かっている。

六年半前からこの部屋の主は長男の甲野欽吾であり、今日からは彼が主宰するロック雑誌『エピタフ』の編集部となる。家具調のステレオセットに夥しいレコード、資料その他で雑然としており、今は窓のカーテンも閉まって冷え冷えとしている。

お手伝いの光江が母屋から客を連れて登場する。

光 江

先にこちらでお待ちくださいとのことでした。

続いて浅井孝之と小野清三が入ってくる。

浅井は口髭にレイバンのサングラスを掛け、カールした長めの髪にジーンズとセーター、その上に黒のトレンチコートを着込んでいる。小野はアイビー調の小ぎっぱりとした髪型と服装で、ウェリントン型の黒縁眼鏡を掛け、ダッフルコートを着ている。

光江、カーテンを開け、暖炉のガストーブを点火する。

浅井 うう寒う。光江さん、お正月は？ お休みもらった？

光江 ええ、大みそかと元旦は根津の実家に。

浅井 へえ。お雑煮は？ 食べた？

光江 そりや食べたわ。

浅井 お餅は？ いくつ食べたの？

光江 やあねえ、どうしてそんなこと聞くの？

浅井 や、だってさ。

光江 (ドキっとして) え、やだ、あたし太った？ そういうのわかる人？

浅井 ふふふ、ウソウソ、全然わかりませーん、冗談ですう。

光江 もお。(と叩く真似をしてから小野を見て) おビールでもお持ちしまし
ようか？

小野 あ、いえ。

浅井 僕らこれから会議なんで。

光江 じゃ、コーヒーかお紅茶でも。

浅井 (小野に) どっちにする？

小野 では紅茶を。

浅井 俺も。

光江 はい。ではどうぞ、ごゆっくり。

光江、出て行く。

二人だけになると同郷の彼らは京都訛りで話す。

浅井 (サングラスを外し) あの人な、実家は根津の布団屋や。お母はんが甲野のおふくろさんと幼馴染で、その縁でお手伝いさんで入らったんや。

小野 (呆れて) 何でもよう知ってんな。

浅井 当り前や、どんな些細な情報でもいつどこで役に立つかわからん。現代は情報戦の時代やで。

浅井、ポケットからチェリーを取り出してマッチで火を点ける。

小野は改めて部屋を見回す。

小野 それにしても、すごいな、この部屋。

浅井 な、俺も最初はびびったわ。この一角だけは戦前からそのままやねんて。

小野 この部屋が甲野の？

浅井 元々はお祖父さんの書斎と応接室やったらしいけどな。こっちが昔の応接室や。(と戸を開けて中を覗き) うわ、返本の山やんけ。

小野 (覗いて) ホンマや。

浅井 見んかったことにしとこ。(と閉めて) 何でも高二的の夏にな、あいつこの二部屋を自分にくれえいうてネゴシエーションして、まんまとぶん捕りよってんて。ここでない受験勉強できひん言うてな。

小野 ふふ、すごいな。

浅井 ま、正真正銘のブルジョワやし。

小野 (肖像画を見上げ) この人が？

浅井 それは親父さんや。今度の田中内閣では大平の下で外務政務次官。

何年かしたら間違いないく外務大臣、へたすりや将来総理にならはお人やで。

小野 ふー。

浅井 そやしな、ホンマ言うたら俺、甲野とのコネクションはこのまま大事にしときたいねん。けどなあ、熊林らの手前、俺らだけ残るいうわけにはいかんやろ。

小野 そやなあ。

浅井 裏切ったら何されるかわからんし。

小野 ふ、まさか。

浅井 アホ、笑いごとちゃうぞ。あいつらが昔おった早稲田新聞会って革マルの巣窟やぞ。パンキーなんかモロやし。

小野 そうか。

浅井 ま、あいつらからしたら、与党議員のお坊ちやまがロック雑誌主宰しとるというのが、そもそも気に入らんかったんやろうけどな。俺は逆にそこが良かってんけど。体制内反体制というのがな。

小野 そんなややこしく考えたことなかったわ。

浅井 まあしかしこの辺が潮時やろ。俺らももう二十四や。俺もこの春から就職やし、おまえも今年の本気で通らなあかんやろ司法試験。お互いロック雑誌なんて道楽してるヒマないで。

小野 うん。

小野、ダッフルコートを脱いでライティングデスクの前に座る。

小野 俺らが抜けたら『エピタフ』はどうなんのやろ。

浅井 そりやつぶれるやろ。残るのは甲野と宗近だけやん。さすがに二人だけではやれんやろ。

小野 やっぱそうか。

浅井 昔でいうたらカストリ雑誌やな。きつちり三号（三合）でつぶれる。けどまあ大抵そんなもんちゃうか？ 同人誌とかミニコミ誌なんて。

小野 まあな。

浅井 （煙草を消して、コートを脱ぎながら）俺な、実はもう決めてんねん。今月武道館のストーンズ観たら、それを最後にロックも卒業すんねん。次の朝いちばんに床屋行ってな、バッサリと髪も短くしてもうて。そんでこれからは歌謡曲聴いてゴルフ習うねん。

小野 何じゃそりや。

浅井 小野、冗談ぬきや、社会人になるいうんはそういうことやで。おまえも一緒にやろうや。

小野 やらへんわ、だいたい俺ストーンズ観られへんし。

浅井 当日でもダフ屋から買えるやろ？

小野 ええてもう。そういうの好かんし。

浅井 おまえ昔からそういう固いところあんな。まあええわ。俺ちよつとト

イレ行ってくるわ。

小野 うん。

浅井、出て行く。

小野 (独り言) 歌謡曲にゴルフて。アホか。

小野、立ち上がり、改めて部屋を見回しながらゆっくりと歩く。書棚を眺め、やがて適当な洋書を抜き出して開く。

小野 おー、すごい、書き込みしてある。

本を戻し、別な段から一冊抜いて開いてみる。

小野 わ、これもや。すごいな。

と、フランス窓が外から開く気配。小野、慌てて本を棚に戻す。藤尾が入ってくる。綺麗なボブカット、黒のタートルにジーンズ、その上に紫色の薄手の長いカーディガンをふわりと羽織っている。胸元には小さな宝石。ラフなようできて一見してエクスペンシブな女性とわかる。

小野 あ、どうも。あの、お邪魔しています。

藤尾 ガシヨー。

小野 は？（外国語かと思う）

藤尾 松の内でしょ、今日までは。

小野 え、と。

藤尾 だからガシヨー。

小野 （ようやく）ああ、賀正？

藤尾 そ、賀正。

小野 では、えーと、謹賀新年？

藤尾、興味深そうに小野を見つめる。

小野 （焦って）いや、普通におめでとうございませうでいいのかな。

藤尾、クスクスと笑い出す。

小野は赤くなる。

藤尾 兄のお仲間？

小野 はあ、小野といいます。

藤尾 ごめんなさい、すぐに出てくから一本だけ吸わせて。（と煙草を取り

出して啜える）いつもここで吸うことにしてるの。自分の部屋だとお
いがこもるから。

小野 あ、どうぞ、ごゆっくり。

藤尾、フィリップ・モリスに火を点け、旨そうに一服する。

藤尾 ロック好きなの？

小野 ええ、まあ。

藤尾 当り前か、ロック雑誌やってんだもんね。誰が好き？

小野 まあ普通にレッド・ツェツペリンとか、ピンク・フロイドとか。

藤尾、ごく自然に「ギター」と相槌を打つ。そのように彼女の会話中には時々ネイティブな発音が混じる。

小野 (その相槌にどきまぎしつつ) デイープ・パープル、キング・クリムゾン、主にブリティッシュ系かな、アメリカン・ロックはあんまり。

藤尾 ストーンズは？ やっぱり楽しみ？

小野 実はそれ、前売券が買えなくて。

藤尾 そうなの？

小野 行きたかったけど。

藤尾 なら、あたしのあげましょうか。

小野 え？

藤尾 切符、武道館の。

小野 や、そんな。

藤尾 いいのよ、どうせそんなに行きたかったわけじゃないし。あとで兄に預けとくわ、あなたの分だつて。

小野 (信じられない) え本当に？ え、本当にいいんですか？

藤尾 もちろん。

小野 あ、じゃ、どうもありがとう。

藤尾 (微笑) どういたしまして。

彼女はステレオの前に行き、蓋を開けて中を覗く。ターンテーブルのLPを見て顔をしかめ、そのまま蓋を閉める。

小野 あなたは、その、どんなミュージシャンが？

藤尾 んー、正直言うとそんなに好きじゃないの。

小野 ロックが？

藤尾 何だかみんなムサ苦しいじゃない。

小野 なるほど。(苦笑)

藤尾 でもそうね、あなたの好きなLed Zeppelinは悪くないわ、歌声がピーンと金属的だから。あとは最近だとDavid Bowieかな。

小野 ああ、『屈折する星屑の上昇と下降』は僕も好きでした。

藤尾 ？ 屈折する？

小野 あ、えーと。

藤尾 ああ Ziggy Stardust のこと？ そうね、あのアルバムは素敵だったわ。totalにsolidで、sharpで、何ていうのかな、すごく切実で。

小野 わかる気がします。

藤尾 本当に？

小野 ええ、何となくですけど。

藤尾 嬉しい。あたしと波長が合う人なかなかいないのよ？

小野 そうなんですか？

藤尾 特に兄とは最悪。

小野 そうなんだ。(苦笑)

藤尾 あ、思い出した。小野さんでもしかしたらあの人じゃない？ 創刊号でPink Floydの詞を翻訳してた。

小野 あ、はい、そうです。

藤尾 そう、あれ、とても良かったわ。

小野 ふふ、それはどうも。

藤尾 ところどころに誤訳があるけど。

小野 ー。

藤尾 でもそんなの全然問題じゃないわ。何だっけ。(諦んじる) 「ワレガモシ 白鳥ナリセバ何処カノ 遠キ空ヘト飛ビ去ラン」

小野、驚いた顔で藤尾を見る。

藤尾 「ワレガモシ 善人ナリセバ貴女トモ 今日ヨリ多クヲ語リシモノヲ」。

小野 すごい、よく覚えてますね。

藤尾 何ていうのかな、あの詞にそんな古風な訳を付けたセンスがちよっ

と素敵だと思ったの。(煙草を消して) あなたたって詩人ね。

小野 さあ、どうかな。(照れくさい)

ノックがあつて、光江が紅茶とシュークリームを運んでくる。

光江 (部屋を見渡して) あら？

小野 ああ、浅井は今手洗いに。

光江 そうですか。(と茶菓をテーブル上に給仕する) 藤尾さんも何かお持ち
しましうか？

藤尾 あたしはいい、もう戻るから。兄さんは？ 何してんの？

光江 一さんと一緒にまだお父様とお話を。

藤尾 まだもめてんの？

光江 さあ、そんなふうでもなかったようですけど。三人でお酒を飲んで
ますよ。

藤尾 まあ何かしら、お客を待たせといて。

光江 ねえ。でも旦那様も今日くらいですもの、家でのんびりおできにな
るのは。(給仕を終えて小野に) ではどうぞごゆっくり。

小野 ありがとう。

光江、出て行く。

小野 もめてるって、何かあったんですか？

藤尾 兄がね、勝手に大学辞めちゃったの。

小野 へえ、それはまた。

藤尾 まあ五年も通って、単位が半分も取れてないんじゃないでしょうか。
ないとは思いますが。

小野 辞めてどうするんだろう。

藤尾 さあ。本格的にやるつもりなんじゃない？ 『エピタフ』とやらを。

小野 なるほど。

藤尾 ね、小野さんって東大卒なんですよ？

小野 え？ ええ、まあ。（と再びどぎまぎする）

藤尾 兄はあんなだし、父もいつそあなたみたいな人を後継者にすればいいのにな。

小野 ——。（答えようがない）

藤尾 ね、今度映画にでも行かない？

小野 え？

藤尾 あたしとじゃイヤ？

小野 そんなことは。

藤尾 （微笑）じゃ近いうちに誘って？ 約束よ？

小野 ええ。

藤尾 Ciao。

小野 どうも。

藤尾、行きかけて戻り、小野を見つめたまま紅茶をひと口すると、再び微笑して出て行く。

小野 (独り言) チャオって。(藤尾の飲んだカップを見て)——口紅付いてるし。

小野、しばしカップを見つめているが、やがて藤尾が唇をつけた所からゆっくり一口飲むと、口紅の味を確かめるように舌で自分の唇を舐めてみる。

小野 (やがて) 何してんねん俺。

そこへ浅井がバタバタと戻ってくる。

浅井 おい最新情報や。今向こうでおふくろさんに聞いてんだけど、甲野のやつとうとう中退してもうたらしいぞ。

小野 らしいな。

浅井 何やおまえ、知つとつたんけ。

小野 今妹さんから。

浅井 え、藤尾さんここへ来たん？

小野 何かその窓から。煙草吸いに来はった。

浅井 ああ、庭の反対側があの人のお部屋やしな。お、このシュークリーム

は近江屋やな。

浅井、ひと口食べて満足げにうなづく。それを見て小野も食べ始める。以下、茶菓を喫しながら――。

浅井 美人やったら。

小野 何か大人っぽい人やった。いくつなんやろ。

浅井 二十三や。

小野 一つ違いか。

浅井 そんなで甲野とは腹違いやで。

小野 え、そうなんか。

浅井 甲野の実のお母はんはあいつが小六だかの頃に亡くなってな、それで今のおふくろさんが後妻に入らったんや。要するにこれ（小指）やがな。（と声をひそめて）二号さんやってん。

小野 ああ。

浅井 元は赤坂の芸者さんでな、まあ甲野からしたら、ある日突然歳の変わらん妹ができてビックリしたやろうな。そやし今でも兄妹あんまり仲良くないねん。妹の方は高校の途中からずっと向こうやったしな。

確かコロナビア大学で心理学か何か専攻しとったんちやうかな。

小野 ホンマに何でも知ってんな。

浅井 当たり前や、こういうんが世の中で役に立つ活きた情報や。ヤードバーズの歴代ギタリストで誰がいちばん巧いとかホンマどうでもええ

ねん。ま、とにかく彼女にはあんまり近づかんこっちゃな。

小野 ? 何で?

浅井 何でて、あれはおまえの手に負えるような女とちやうで。だいいち金かかりそうやんけ。

小野 (うなづく) 確かに。

浅井 それにおまえ、フィアンセがおるやん。

小野 え?

浅井 小夜子さんやっただけ。

小野 あの人は——そんなんちやうよ。

浅井 え、そうなんけ? 俺ずつとそうやと思ってたわ。そやし司法試験通つたらこつち呼び寄せて、すぐに結婚すんのやろうなって。

小野 全然。そんな約束はまったくないし。

浅井 何や、そうやったんか。まあええわ。

浅井、食べ終えて紅茶を飲み「ふうー」と息をつく。

浅井 それにしても、甲野のやついったい何してんのやろ。

小野 何か向こうで酒飲んでるらしいで?

浅井 ええ? 何やそれ。

小野 親父さんと宗近と三人で。

浅井 何やいな、ほな俺らもビール飲んでたらよかったやん。なア?

小野 うん、そやな。(苦笑)

浅井、立ち上がって伸びをする。

ステレオの蓋を開けてターンテーブルのLPを見る。

浅井 ビートルズかよ。ふる。(と閉める)

と、笑い声がして、宗近と甲野が賑やかに入ってくる。

二人ともすっかり様子が変わって宗近は癖毛の長髪、ベルボトムのスラックスになぜか素足、ざっくりとした手編みのセーターを着ている。

甲野は胸まであるストレートの長髪にジョン・レノンを真似た丸眼鏡をかけ、襟の大きなブラウスにフェアアイルのベスト、コール天のパンツロン姿。

二人はほろ酔いで、すこぶる上機嫌である。

宗近 おー待たせたな。あれ？熊林やパンキーたちはまだか。

浅井 あああいつら今日はちよつとな。何だよ、酒飲んでたって？

宗近 わりイ、甲野の親父さんといつい盛り上がっちゃまってな。でもこいつがいけないんだよ。(甲野に)おまえが北京の鼻血の話を俺にも聞かせてやれとか言うからだ。

甲野 (へらへらと)でも面白かったろ？笑ったろうが。

宗近 確かに笑ったけどさ。

小野 何だい、北京の鼻血って。

宗近 いや去年さ、毛沢東と会った田中首相が興奮して鼻血が止まんなかったんだってよ。それを傍にいたこいつの親父さんにさ、「おい新聞には内緒だぞ、言ったら絶対鼻血ブーって書かれるから」って言ったって話。

甲野 傑作だろ？ 鼻血ブーってまんま絵が浮かぶじゃんか、田中角栄が鼻血ブーって。（とへらへら笑う）

宗近 もういいってその話は。おいそんなことより今日はな、すごい重大発表があるんだよ。

浅井 （チラッと小野を見てから）重大発表って？

甲野 パンパカパーン、パパパンパカパーン。

宗近 うるさいな、古いよおまえ。

甲野 今週のハイライト。

宗近 いいからちよつと黙ってるこの酔っ払い。

浅井 何だよ、甲野が大学辞めたって話？

宗近 あれ？ その話はもう知ってたのか。違う違う、そんな些末な話じゃない。いいか聞いて驚くなよ。（と言いかけて）いや、やっぱこういうことは編集長から。

甲野 いやいや、ここは営業部長のあなたから。

宗近 いやいやいや。

甲野 いやいやいや。

浅井 どっちでもいいよ。何だよ、もったいつけずに言えよ。

宗近 ではまあ僭越ながらこの俺から。（オホンと咳払いして）えー我らの

革命的先鋭的ロック・マガジン『エピタフ』は、いよいよ次号から大
いなる飛躍を遂げるのであります。まずその一。次号から甲野氏のこ
の部屋が公式に『エピタフ』編集部となります。今までは不肖この宗
近一の実家が連絡先でありましたが、この部屋について『エピタフ』
専用の電話が引かれるのであります。そしてその二。何と何と、我ら
が『エピタフ』は次号から全国の一般書店にて販売されることとなり
ました！

甲野 ジャーン。(とギターを鳴らす真似)

浅井 (ピンと来ず) 全国販売？

小野 どういうこと？

宗近 つまり次号からは取次を通して販売するわけ。今までみたいにみん
なで手分けしてさ、いちいち書店を回って配本したり集金したりしな
くてもいいってことだよ。

小野 それは、何かすごいな。

宗近 まあ簡単じゃなかったけどな。内容とかこれまでの販売実績とか、
何度も向こうの窓口に通って説明してさ。でもまあ何とか東販ってい
う大手の取次さんで、我々『エピタフ』の口座を無事開設することが
できたってわけよ。

甲野 ジャガジャーン。

浅井 てことは、え？ どういうことだ。

小野 『ミュージック・ライフ』とか『ニューミュージック・マガジン』
とかと同じってこと？

甲野 そういうこと。これからは全国の書店で、俺たちの『エピタフ』がやつらと同じコーナーに同じように並ぶってこと。

小野と浅井、顔を見合わせる。

宗近 そしてこれを機に、甲野は慶応義塾大学文学研究科を晴れて退学し、その不転の決意を広く内外に示したというわけだよ。

甲野 ワー、パチパチパチ、センキュー、センキュー。

甲野、聴衆の拍手に応えて手を振る真似。

浅井 けどそれ、よく親父さんが許してくれたなあ。

宗近 うん、正直中退の件だけは俺も心配してたんだが（甲野に）存外すんなりとなア？

甲野 まあ最初のうちは何だかんだと言ってたけどね。もう届を出してき たって言ったたら、そうか、ならもう仕方ないなって。

宗近 それでは酒盛りになったという次第なのよ。

甲野 正直拍子抜けの感がなくもない。

宗近 心配すんな、そのぶんおふくろさんが当分うるさいから。というわけ以上、重大発表終わり。

浅井 けど——本当にそれ大丈夫なのか？ だって君、いずれは親父さんの跡を継ぐんだろ？

甲野 継ぐもんかよ。俺はロックの伝道に生涯を賭けると決めたんだから。

政治家なんて真つ平じゃ。

浅井 ふーん、何かもつたいねえなあそれ。

と、ノックがあつて、甲野の父、大吾が「お邪魔するよ」と入ってくる。兵児帯をしめた和装。微醺を帯びてやはり上機嫌。

浅井、弾かれたように直立する。それを見て小野も慌てて立つ。

甲野 何ですか。僕たちはこれから編集会議だと言つたでしよう。

大吾 まあ少しくらいいいじゃないか。せつかくの機会だ。挨拶だけだよ。

(小野と浅井に) やあいらつしやい。

浅井 (ガチガチに緊張して) お邪魔してます。早稲田大学商学部の浅井孝之と申します。この春から丸の内のダイソー商事に入社します。どうぞよろしくお願いいたします。

大吾 甲野大吾です。(と政治家らしく両手で握手する)

小野 小野清三です。今は司法試験を目指して浪人中です。

大吾 やあ。いつも欽吾が世話になってます。(と同様に握手)

宗近 おじさん、小野はこう見えて東大卒ですよ。

大吾 ほう。

宗近 わが『エピタフ』のインテリ最右翼です。その次が欽吾、頭の出来がもつとも悪いのが俺と浅井です。

浅井 僕は君よりはマシだ。

宗近 ハハハ、そうか、やっぱり俺がいちばん下か。

大吾 いやいや、一君には知識より大事な知恵というものがあるよ。その点では理屈屋の欽吾の方がよほど危なっかしい。

甲野 理屈屋じゃなく理論家と言つてほしいな。

大吾 ほらみる、そういうところが危ないんだ。（小野と浅井に）一君のお父さんとは三十年来の友人でね。だから昔からよく知つとるんだよ。

宗近 ひと頃は藤尾さんをお嫁にしてくれるという話までありましたね。

大吾 今だって大歓迎だよ。一君がもらつてくれるなら。

宗近 本当ですか。ならいつちようプロポーズしてみるかな。

甲野 やめとけあんなの。確実に不幸になるぞ。

宗近 ハハハ、尻に敷かれるか。藤尾さんならそれもまた一興だがな。

小野 ー。

そこへ「失礼いたします」の声あつて、光江がウイスキーやグラスを載せたワゴンを押して入ってくる。

宗近 おおつと、オールド・パーとは豪勢ですなあ。

大吾 まあ君たちの前途を祝つてささやかな差し入れた。みんな水割りでもいいね？

浅井 ハイ、ありがとうございます。

小野 いただきます。

宗近 水で割つちや罰当たりだよ。光江さん、僕はロックン・ロール。

光江 オンザロックってこと？

宗近 イエス。

甲野 高い酒をありがたがるのは俗物の極みじゃなかったのか？

宗近 誰がそんなこと言った。

甲野 自分で言ったんだ、ゴールデン街の何とかいう店で。

宗近 「むささび」か。それはもう忘れる。とにかく高い酒は薄めちやいかんというのがうちの家訓なのじゃ。

浅井 甲野先生はその、宗近君のお父様とはどちらで？

大吾 大陸で一緒だった。新京、今の長春だね。私は大使館の二等書記官で、宗近さんは満映の技師だった。たいへんに酒の好きな方だね。

浅井 へえー。

大吾 引き揚げて来てからは、長いこと高校で古文を教えていらした。(宗近に) 確かもう？

宗近 ええ、三年前に退職して、今は悠々自適の楽隠居です。

大吾 そうかあ、羨ましいいねえ。一度また、どこかでゆっくり酌み交わしたいとお伝えしてくれたまえ。

宗近 それはいいですけど、おじさんの方が当分それどころじゃないでしょう。

大吾 (苦笑) ううん、そうだなあ。

小野 一つお聞きしてもよろしいでしょうか。

大吾 何だい？

小野 日米関係はこの先どうなりますでしょうか。日中国交回復を自分た

ちの頭越しにやられて、僕はアメリカが何らかの報復的措置に出るんじゃないかと心配なのですが。

大吾 ううん、それは大変にデリケートな問題だがね。だが、戦後我々が粒々辛苦でもって築いてきた日米の関係というのは、これはそれほどヤワなものではないからね。

小野 そうでしょうか。

大吾 だいいち下手に報復なんかすれば、日本国民の対米感情が再び悪化してしまう恐れがある。そんな得にならないことは向こうもせんと、私は思つとるがね。

小野 そうですか。ありがとうございます。

光江 (酒を作り終えて) ハムでも切つてまいりましょうか。

大吾 そうだね、何か適当に見つুকろつて。

光江 はい。

宗近 では諸君とりあえず乾杯だ。ほらほら酒を持って。

光江、出て行く。一同はグラスを持つ。

宗近 では我らが『エピタフ』に、おじさんから何か餞のお言葉を。

大吾 そうかね。では。

大吾、グラスを手に立ち上がる。一同も立つ。

大吾

私にはもう君たちヤングの心持ちなんてのは正直わからない。だからうるさいことを言うつもりはない。造反有理だろうがロックン・ロールだろうが、君たちは自分の信じた道を思いきって進めばいいと思ってる。ただね、一つだけ確かなことがあるよ。それは君たちだって、やがて否応なく年を取るということだ。二十年先、三十年先にこの国を動かし、複雑な国際社会と渡り合わなきゃならんのは、他でもない君たち自身なんだよ。そのことだけは、どうか肝に銘じておいてもらいたいな。

宗近

大丈夫です。その頃にはきっと世界中の人間がロックで連帯してますから。

大吾

そうだろうか。

甲野

ロックはただの音楽ジャンルじゃありません。これまで人類が経験したことのないまったく新しいタイプの思想であり、マクルーハン言うところの新しいメディアなんだ。それはきっとお父さんたちが想像できないくらいの、地球的規模の新しい連帯を可能にする。我々の『エピタフ』はそのための小さな第一歩なんです。

宗近

そもそもビートルズを聴いて育った人間同士は、殺し合いなんて絶対しませんからね。

甲野

オール・ユー・ニード・イズ・ラブ。その頃にはきっと世界中から戦争なんてなくなってますよ。

大吾

(うなづく) 本当にそうだといいいね。では、そんな世界に。

一同、乾杯する。

宗近 んー旨い。

浅井 本当にわかんのか？

宗近 当り前じゃ。やっぱり高い酒は違うのお。

甲野 まごうことなき俗物じゃ。

甲野と宗近、へらへらと笑い合う。

宗近 あ、時におじさん、一つご相談があるんですが。

大吾 何だい。

宗近 これを機にあいつを外しちゃいけませんかねえ。（と肖像画を見る）

大吾 ん？

宗近 どうも似合わんですなあ、ロックマガジンの編集部に政治家の肖像画つてのは。どうせなら糸公のやつにジョン・レノンの肖像でも描かせてさ。

甲野 お、いいなそれ。

大吾 いやいやダメだ、それだけは許さんぞ。

甲野 （苦笑）まだダメか。

大吾 それくらいの矛盾をアウフヘーベンできんようじゃア君たちの雑誌もたかが知れとるぞ。

宗近 う、痛い所を突かれた。

大 吾 ハハハ、まああれはあれで、あのまま掛けておきなさい。いいね？

と、ノックがあつて、欽吾の継母、志津子が入ってくる。少々これ見よがしに高級な和装。

志津子 あなた、外務省の山之内さんからお電話ですよ。

大 吾 お、そうか。

志津子 まあまあ何でしょう、もういい加減になさいましな。あなたが居座つてちや皆さんがお話しできないでしょう。

大 吾 そうだな、ではこれで失敬しよう。（と手を差し出す）

浅 井 （握手）どうもありがとうございます。

小 野 （握手）ご馳走様でした。

大 吾 （戸口でふり向いて）欽吾。

甲 野 はい。

大 吾 言うまでもないが、経済的援助はしないぞ。ちゃんと独立独歩でやれよ？

甲 野 当たり前だよ、体制側から援助なんかもらったらロックの名折れですから。

大 吾 うん、それならいい。（と行きかけて）おっと。（とよろける）

志津子 あらあらもう、いやですよあなた。

大 吾 大丈夫だ。ふふ、少し飲み過ぎたかな。

大吾、出て行く。

志津子 ホホホ、本当にごめんなさいねえ。昔からいったん始めると長つ尻な人で。あら、こちらが小野さんって方？

小野 はあ。

志津子 まあまあ初めまして。欽吾の母でございます。

小野 小野です。初めまして。

志津子 ホホホ、あなただけはさっぱりした御髪で結構ですこと。藤尾から聞きましたけど、さすがに東大をお出になった方は違いますわねえ。

甲野 お義母さん。

志津子 欽吾さんなんかホント、あたくしたちに何の相談もなくさつさと慶応を辞めちゃうんですもの。ねえあなた。いくら東大に落ちたからって、せっかく入った大学じゃございませんか。ねえ。

甲野 もういいってば。今はあなたの方がよっぽど邪魔になってますよ。

志津子 あらやだ、あたくしとしたことが。ホホホ、では皆さん、これからどうぞ欽吾さんをよろしく。あなたもね浅井さん。一さんも。ではどうぞごゆっくり。ごめんくださいませ。

志津子、出て行く。

宗近 ヒヒヒ、これは当分ネチネチ言われるのじゃ。

甲野 うんざりなのじゃ。

宗近 まあ小言くらいは言わせておけなのじゃ。

甲野 (小野に) 妹に会ったのかよ。

小野 うん、さつきね。ストーンズの切符を僕に譲ってくれるそうだ。

宗近 ほお、藤尾さんが？

浅井 何だよ、よかったじゃんか。

甲野 へえ、あいつにしちゃ上出来だ。俺だって小野と一緒に観る方が全然嬉しい。ストーンズだってその方が喜ぶに決まってる。

宗近 となるとだ、第4号はやっぱストーンズ総力特集で決まりだな。

甲野 俺もそう考えてた。表紙もミック・ジャガーのアップでな。

小野 その話なんだけど——ちよつと待ってほしいんだ。

宗近 ん？

甲野 何だい。

小野 うん。いや、この状況でたいへん言いにくいんだけども。

小野、躊躇する。見かねて浅井が話し始める。

浅井 いや実はな、今日は俺たち辞めるって言いに来たんだ。

宗近 辞める？

甲野 『エピタフ』をか？

浅井 ちなみに、熊林やパンキーや岩村たちも、みんなもう抜けるって。

君らにそう伝えといてくれて言われた。

宗近 あいつらと会ったのか。

浅井 実はここに来る前に茶店に呼び出されてさ。

甲野 あいつらはいいいよ。どうせろくに働かんし。

宗近 そうだな。書いてくる原稿もつまらんしな。

浅井 でき、俺もまあこの春から社会人だしさ。小野だつて試験勉強があるし。どっちにしても、これまでのようには参加できなくなるしな。

それなら俺たちも一緒に辞めようかって。(小野に) な？

小野 うん。

宗近 んー、そつかあ。

甲野 それは痛いな。

宗近 投稿だけでも無理か。

浅井 悪いけど俺はもう。会社入ればきつとそんな余裕ないと思うし。

甲野 小野は？

小野 僕は投稿くらいならできると思う。でも、それも君の返答次第かも知れない。

甲野 俺の？ どういう意味？

小野 熊林たちが辞める理由なんだけども。

浅井 小野、それはもういいよ。

小野 うん、でも。

浅井 今さらどっちでもいいよそんなこと。

小野 うん——。

宗近 何だよ、気になるな。

甲野 理由を聞いてるなら言ってくれよ。

小野 (やはり決心して) 彼らは君にひどく腹を立ててる。

浅井 おい小野。

甲野 (浅井に) いいから。(小野に) 言ってくれ。なぜだ。

小野 つまり——君が不正をしたって言うんだ。

宗近 不正？

小野 ストーンズの切符を、不正な手段で入手したって。

甲野 え？

宗近 (気色ばむ) おい、どういう意味だよそれ。

浅井 (仕方なく) つまりこういうことだよ。前売日の前日さ、俺たち新宿で朝まで飲んだじゃないか。で、俺と宗近だけは帰り道だったからそのまま東急本店のプレイガイドに並んだろ？ それでまあ何とか前売券買ったわけだけどき、あの日いったん帰った連中は、小野も、あいつらもみんな売り切れで買えなかったわけじゃないか。なのに甲野だけ買ったってのは変じゃないかって、まあ連中はそう言うわけだよ。それも真っ先に売り切れたはずのS席だろ？ だからあいつら、君の前売券は父親のコネで不正に入手したものに違いない、俺たちはそれが許せない、もう完全にシラけた、だから辞めるって——まあそういう話だよ。

宗近 (カツとなる) 何だそりゃア。ちくしょう、くだらん邪推をしやがって。今度会ったらぶっとばしてやる！

浅井 やめとけて。あいつら元革マルだぞ。

宗近 関係あるカツ。そう思うんなら堂々とここへやって来て、直接甲野

に質せばいいじゃないかよ。え、違うかッ？

そこへ光江がハムとチーズを並べた皿を持って入ってくる。

光江

（笑顔で）奥様が皆さんもほどほどにするように言えつて言うのよ。いいじゃないのよねえ、まだお正月なんだから。（と一同を見渡す）

誰も口をきこうとしない。

光江、緊迫したムードに気づき、そっと逃げるように出て行く。

宗近

甲野はさ、本店じゃなくて東横店の赤木屋プレイガイドで買ったんだよ。だよなあ？

甲野

（うなずく）あそこ穴場でき。けっこういい席が残ってたりするんだよね。

小野と浅井、意外そうに顔を見合わす。

浅井

何だ、そうだったのか。

宗近

当り前だよ。甲野はそんなインチキなことする男じゃない。昔からそういう筋はきちんと通すやつだよ。だいたい親父さんが国会議員だつても別にこいつのせいじゃないだろうがよ。ちえ、もういいよあんな連中、いなくなつてかえつて清々すらア。

宗近、酒を一気に飲み干すとワゴンに行く。乱暴な手つきでもう一杯作り始める。小野は甲野の前に行く。

小野 すまなかった。僕も、そうなのかなってずっと疑ってた。そういうの、ちよつとイヤだなって。

甲野 (苦笑) いいよもう。一緒に観ようぜ、ストーンズ。

小野 うん。

甲野 (宗近にグラスを差し出して) おい、俺のもついでに。

宗近 ロックン・ロールか？

甲野 水で割ってよ。

宗近 ダメだ。俺はロックン・ロールしか作らん。

甲野 じゃいいよそれで。

宗近 よし。(とグラスを受け取り作り始める)

小野 投稿だけは続けるよ。

甲野 うん、助かる。

ノックがあつて、志津子が再び顔を出す。

甲野 何ですか。

志津子 やだねえ、そんな怖い目で見ないでちょうだい。お父さんから伝言ですよ。

甲野 伝言？

志津子 何でもね、えーと（と電話のメモを見て）「先ほど法務省入管局から領事部に連絡あり、バンドリーダーの（読みにくい）」何これ、ミック・ジャガーっての？

宗近 ええ、ミック・ジャガーがどうしたんです？

志津子 「入国は、認められずとのこと」ですって。

一同、思わず「えッ」と声が出る。

志津子 明日の新聞に出るそうよ。

甲野 ミックの入国が認められないって、じゃいったいどうなるんですか、ストーンズの公演は。

志津子 知りませんよあたしに言われても。そのミックさん抜きでやるんじゃないの？

甲野 （カッとなって）ミック・ジャガー抜きのストーンズなんてそんなのあり得ないでしょッ。

志津子 そんな、あたしに怒らないでちょうだい。ならきつと中止になるんでしょう。知りませんよ。急いで伝えてやれってお父さんがおっしゃるから来ただけなんですから。

宗近 おじさんは？今どうしてます？

志津子 何ですか向こうのソファでデーソとのびちまいましたよ。ホントもう弱くなっちゃって。やっぱり歳だわねえ。じゃ、確かに伝えました

からね。皆さんもどうぞ、お酒はほどほどになさってね、お願いよ？

志津子、出て行く。

浅井

（思わず訛りが出る）何やそれ。ホンマかいや、切符全部売り切れてんのに今さら中止で。普通そんなんするか？

小野

前々からそんな噂があるにはあったよ、麻薬の前科があるから日本には入れないかも知れないって。

宗近が「クツソーツ！」と大声で吠える。

宗近

（続けて）何もマリファナ持ち込んで商売しようって話じゃないだろうがよ。ちくしょうふざけんなよ法務省。

浅井

あーあ、日本はあかんな。まだまだやな。

宗近

ちつくしよう、木っ端役人があ。

浅井

シラけるなあ。あーもう完全にシラけてもうたわあ。

小野

そやな。

宗近

（タメ息）そうだよなあ。こいつはまったく。完全にシラけちゃまったよなあ。

一同すっかり消沈して——沈黙。

と、甲野がステレオの蓋を開け、LPに針を落とす（A面4曲目）。

ビートルズの『レイン』が大音量で流れだす。

宗近が音楽に合わせてヤケクソ気味に身体を揺らし始める。

小野も浅井もそれぞれの思いで音楽に身をゆだねる。

だが甲野は三十秒足らずで止めてしまう。

甲野 ごめん。

宗近 どうした。

甲野 俺、嘘ついた。

宗近 は？

甲野 ストーンズの切符、本当は親父に頼んだ。

宗近 なに？

甲野 あいつらの言う通りなんだ、本当は。

宗近 ー。

甲野 ごめん。(小野に) だからもういいよ。

小野 え？

甲野 『エピタフ』はもう廃刊にしよう。

宗近 おいちよつと待て、何言ってるんだよ。

甲野 (堰を切ったように) だってもうそうするしかないじゃんか！ スタッフは足りないし、ストーンズは来ないし、日本はまだまだだし、俺は国会議員の息子でイヤらしい嘘つきだし！ こんなのもう、辞めるしかないじゃんか！

宗近 よせよもう。そんなこと言うな。

甲野 だって本当のことじゃんか全部ッ！

宗近 いいからよせッ。

甲野 ー。

宗近 自己批判はいいが、自分を憐れむなよ。らしくないよおまえ。そういうのおまえがいちばん嫌いな人間だろ？

甲野 俺はーずっと俺が嫌いだよ。

甲野、泣きそうになる——と、宗近が甲野をいきなりハグする。

甲野 ちよ、何だよ。

宗近 (怒ったように) オール・ユー・ニード・イズ・ラブじゃ。

宗近、しばしそのまま抱きしめている。

甲野 (落ち着きを取り戻して) ——サンキユ。もう大丈夫だ。

宗近、甲野の肩をぼんぼんと叩いて離れる。

宗近 よし、厄落としにストーンズ聴こうぜ、思いっきりバカでかい音でさ。何がいい？

浅井 そらもう『ジャンピン・ジャック・フラッシュ』やろ。

甲野 『ストリート・ファイティング・マン』。

宗近 (指を鳴らして甲野を指し) そっちからだ。

宗近、レコードを探し始める。

と、志津子がいきなり戸を開けて、

志津子 (オロオロと) 欽吾さんちよつと来てちょうだい。お父さんの様子が

何だか変なんだよ。

甲野 え？

志津子 叩いても揺すっても全然起きないのよ、目も白目を剥いちやってウンともスンとも言わないの。

甲野 !

宗近 おばさん、それ今すぐ救急車、早く、大至急ッ!

宗近、叫びながら飛び出して行く。

続いて欽吾、浅井、小野も続く。

志津子 え？ ええ？

志津子もオロオロとそれを追う。

よしだたくろうの『結婚しようよ』とともに——舞台、溶暗する。

同年、三月の終り。うららかな午前十一時ころ。

窓と応接室の戸口が開け放たれている。

テーブルの上に新たに電話が置かれている。

ステレオから『結婚しようよ』が流れている。

フランス窓から藤尾が入ってくる。黒のロングスカート、シックな紫色のブラウスに金のアクセサリー、煙草を啜え、手には『ぴあ』の最新号を持っている。彼女は煙草に火を点け、しばし『ぴあ』のページをめくる。

と、電話が鳴る。

応接室からバックナンバー数冊を抱えた糸子が慌ただしく出てくる。彼女はトレーナーにオーバーオールを着て野球帽を後ろ前にかぶっている。

糸子

(藤尾に気づいて) あら、お久しぶりです。お邪魔しています。

藤尾は微笑む。糸子は急いでステレオを止めて電話に出る。

糸子

(電話に) ハイ、『エピタフ』編集部です。——あ、ありがとうございます。——ハイ、ありますよ。——創刊号から三号まで全部ですね？ではえーと、送料と合計で七百八十円をですね、現金書留にしてこちらまでお送りいただけますでしょうか。折り返し発送いたしますので。

——ハイ、奥付のその住所宛てです。よろしくお願ひします。——え？
——あ、そうなんですか。わー、それはごめんなさい、何度も何度も
ここしばらくスタッフがずっと出払ってたもんですから。——ええ、
もちろん。ぜひ定期購読をお願ひします。——ありがとうございます。
それではどうも、ハイ、ごめんください。

糸子、電話を切る。

藤尾 いたんだ。

糸子 今日はバイトがお休みだったから。何だかんだでここんとこ半月くら
い誰も来てないでしょう？ 郵便物とか雑用とかいろいろ溜まっちゃ
ってて。

藤尾 大変ね。

糸子 バックナンバーの注文がものすごく来るんですよ。やっぱり反響の大
きさとか全然違うのね、全国販売になると。投稿の数だって何倍にも
なった感じ。

藤尾 へえ。

糸子 きつと次の号はもつといいものが出せると思います。

藤尾 そう。よかったじゃない。(さして興味がない)

糸子、再び『結婚しようよ』に針を落とし、宛名書きされた大きな封
筒に、今持ってきた創刊号から二号までのバックナンバーを三冊ずつ

揃えて封入し始める。藤尾は煙草を消して、糸子が持ち込んだらしい
数枚のドーナツ盤のジャケットを見る。

藤尾 糸子さん、本当はこういうのが好きなんだ。

糸子 (苦笑) 内緒よ？ 今日にはあたししきかないから。

藤尾 (次々見て) よしだたくろう。かぐや姫。青い三角定規。え、ハニー・
ナイツ？ ふーん。

糸子 藤尾さんは？ 今日はこちらからどこかへお出かけ？

藤尾 友だちと映画に。

糸子 わぁいいなあ。何を観るの？

藤尾 文芸坐で『アントニーとクレオパトラ』をやってるっていうからそれ
観ようかなって。

糸子 すごい。大作。チャールトン・ヘストン？

藤尾 去年向こうでも観ただけだね。ちよつと友だちの感想も聞いてみた
くて。

糸子 へえ。

藤尾 あなたは出かけたりしないの？ 外は春爛漫よ？

糸子 ー行きたいんですけどねえ。でも仕事もあるし。

藤尾 ねえ。

糸子 はい？

藤尾 糸子さんってどうしていつもその帽子かぶってるの？

糸子 あ、これやっぱり変？

藤尾 ううん、似合ってるからいいけど、何でかなって。

糸子 これ必需品なの。写植オペレーターつてすごく目をやられるんですよ。上と下から同時に強い光がくるから。だから仕事中はいつもこうして（とひさしを前にして）サングラスかけて。

藤尾 ふーん。

糸子 （笑って）こんな話興味ないでしょう。

藤尾 ごめん。全然ない。

糸子 だと思った。（と笑いながら帽子を戻し作業に戻る）

藤尾 美大は？ もうあきらめたの？

糸子 うーん、二年挑戦してダメだったからもういいかなって。それに今は『エピタフ』のレイアウトとかデザインとか全部任せてもらってるでしょ？ こっちの方が全然やりがいがあるっていうか。

藤尾 そう。

糸子 兄さんも言うのよ、おまえももうこれを一生の仕事にしちまえばいいじゃんとかって。

藤尾 一生ってひどいわね。じゃ結婚は？ どうするの？

糸子 結婚とかは——あたしはたぶんしなないと思う。

藤尾 そうなんだ。

糸子 そういうの向いてないもの。

藤尾 こんな歌聴いてるのに？

糸子 そもそも相手もないし。

藤尾 あたし、あなたはいつかお姉さんになるのかなって思ってたけど？

糸子 え？

藤尾 だって好きだったでしょ？ ずっと。

糸子 (赤くなる) やあね。欽吾さんのことは——そんなんじゃないわ。

藤尾 いいじゃない照れなくなつて。どうせいないし。

糸子 何て言うか、欽吾さんのことはずっと尊敬してるの、あたしたち。

藤尾 尊敬？ へえー(苦笑) あんな人のどこを？

糸子、作業を終えて、真顔になる。

糸子 いろんなことを真面目にいっぱい考えてて、いつも一生懸命なところ。(立ってステレオの側に行き、演奏の終わったEP盤を袋に仕舞いながら) 今度のことだってそうだわ。お父様が急にお亡くなりになって、メンバーも大勢抜けて、とても最新号なんて出せる状態じゃなかったのに、しゃかりきになって今までで一番いい『エピタフ』を作ったんだもの。すごく立派だと思つたわ。

藤尾 それ、ただ気分屋つただけだと思うけど？

糸子 そうかしら。

藤尾 父親が死んでかえつてムキになつただけじゃん。

糸子 そういふところもあるかも知れないけど。

藤尾 まあお薦めはしませんけどね、あなたがお姉さんになってくれるのは歓迎よ？

糸子 (苦笑) そう言う藤尾さんこそどうなんですか。

藤尾 あたし？

糸子 もちろんあちらで恋人とかいたんでしよう？

藤尾 そうね、まあいちおう。

糸子 どんな人？ やっぱりアメリカ人？

藤尾 そう。

糸子 わ、すごいすごい。ね、どんな人？ 映画俳優だと誰に似てる？

藤尾 映画俳優？ んー、そうね、強いていえば Redford。

糸子 え、ロバート・レッドフォード？ ええー、すごい！ 一度会ってみたいなあ。

藤尾 (笑って) とつくに別れちゃったわよ。

糸子 何だあ残念。でも素敵ねえ。さすが藤尾さんね。

と、「やっぱりこちらにいらしたんですか」と声がして、フランス窓から小野が入ってくる。

糸子 あら小野さん。

小野 あ、やあ。

糸子 え？ どうして？ (藤尾の部屋から？)

小野 あ、いや、次の号にと思ってデヴィッド・ボウイの詞を訳したんだけどね。間違いがないか、藤尾さんにチェックしてもらおうことになってて。

糸子 あ、そうなんですか。

小野 宗近君と甲野君は？ まだ旅行中？

糸子 そうなんですよお、もう十日も帰って来ないんですよ？

小野 京都は今頃はいいからね。へえ、それにしても十日もか。よくお金が続くなあ。

糸子 何かライブハウスで知り合った京大生の寮にずっと泊めてもらってるんですって。

小野 もしかして吉田寮かな。

糸子 あ、そこです。でも全然連絡つかなくて困ってるんですよ。いちおうさつき伝言は頼んだんですけどね。隔月刊だっていつても、いくら何でもそろそろ帰ってきてもらわないと。あたし一人で勝手に進めるわけにはいかないし。

小野 そうだねえ。

糸子 取次さんからも発売日には必ず納品してくれって言われてるし。あ、そういえば小野さんて京都なんですよね？ お目付け役で一緒に行ってもらえばよかったわ。

小野 いちおう誘われたんだけどね。

糸子 春休みの帰省とかなさらないんですか？

小野 まあ帰るほどの用事もないし。それに、案内しろって言われても、京都の人間は案外名所旧跡なんか知らないもんだよ。

糸子 へえ、そういうもんなんですか？

小野 うん、意外とそんなもん。

糸子 へえー。あ、でもちようどよかった。あたしちよっと郵便局でこれ出

してくるんで。二十分くらい電話番してもらっていいですか？ 兄か
欽吾さんからかかってくるかも知れないんで。

小野 いいけど。何？ バックナンバー？

糸子 そうなんです。やっぱり全国販売ってすごいですよ。北海道、静岡、
大阪、高知。

小野 へえ、すごい。

糸子 この分ならあのお部屋の中もだいぶ片づいちゃう。じゃちよつと行っ
てきまあす。

糸子、出て行きかけて「あれ？」とふり返る。

糸子 あの、もしかして。

小野 何？

糸子 (藤尾に)一緒に映画を観るお友だちって、まさか小野さん？

小野 え？

藤尾 そうよ。だってつき合ってたもん、あたしたち。

小野、驚いた顔で藤尾を見る。

糸子 あ、そうだったんですか。(どきまぎする)

藤尾 キスはまだただけど。(小野に)ね？

小野 うん。(慌てて糸子に)あ、そんなのは、うん、全然。

藤尾 まだ間接キスだけ。

小野 (赤くなって) あ、や。

糸子 (赤くなって) あー、そうだったんだ。ふふ、全然知らなかったわ。

あの、じゃ、行ってきます。

糸子、出て行く。

藤尾 糸子さんて可愛い。赤くなっちゃって。

小野 (動揺して) 見てたんですか？

藤尾 何を？

小野 その、間接キス。

藤尾 見てるわけじゃないじゃない。やあね、本当にしたの？

小野 あ、いや。(さらに動揺する)

藤尾 ふふふ、バカな人。

藤尾、可笑しそうに笑いながらステレオのチューナーをかけ、F E N

からダイヤルを回して穏やかな室内楽にする。

小野、自嘲気味に苦笑する。

彼女は再び『ぴあ』をめくる。

藤尾 それにしてもこれ便利よね。『エピタフ』なんかよりよっぽど世の

中の役に立ってんじゃない？

小野 確かに最初に思いついた人間はすごいですね。さすが東京は違うと

思ったな。今日は『アントニーとクレオパトラ』でしたね。

藤尾 Yes. ちゃんと予習してきた？

小野 埃及（エジプト）の御代しろし召す人の最後ぞ、かくありてこそ。

藤尾 Hmum!

小野 漱石の訳した侍女の最後の台詞です。

藤尾 （微笑）あなたのそういうところ好きよ？

小野 藤尾さんはクレオパトラがお好きなんですか？

藤尾 どうして？

小野 いや、何となくお似合いだなと思って。

藤尾 別のでもいいわよ？

小野 何か観たいものありますか。

藤尾 ええ。荒木一郎。

小野 荒木一郎？

藤尾 『ポルノの女王 につぼんセックス旅行』。

小野 えー？

藤尾 ウソよ。（と雑誌を閉じて）二年くらい前かしら。ブルックリン・ア

カデミー・オブ・ミュージックで上演された『アントニーとクレオパ

トラ』の初日を観たの。

小野 演劇？

藤尾 そう。とっても野心的なカンパニーでね。クレオパトラはアジア人

が演じたの。たぶんチャイニーズ系。

小野 へえ。

藤尾 開演前の客席は満員。でも一幕が終わった頃には半分くらいになってた。向こうの観客って残酷なくらい正直なの。期待外れと分かったら途中ででもどどん席を立て帰っちゃうのよ。

小野 それは、確かに残酷ですね。

藤尾 結局彼らが観たかったクレオパトラってエリザベス・テイラーなのよね。そこに鼻の低いアジア人が出てきて台詞らしきものを必死になつて喚いたところで、彼らには何も響かない。何の興味も示さないの。最後に幕が降りた時には、お客は四分の一くらいしか残ってなかったと思う。拍手もゾツとするほどおざなり。

小野 あなたは最後まで観たんですね。

藤尾 ええ。見届けたかったから、ちゃんとカーテンコールまで。でもがっかりだったわ。

小野 というと？

藤尾 クレオパトラ役のその女優さん、カーテンコールで泣き出しちゃったの。オロオロした顔をして。最低。醜悪だったわ。

小野 ー。

藤尾 あたし、舞台を観てあれほど怒りを覚えたことないな。彼女は最後の最後で、クレオパトラを演じる最高のチャンスを自ら放棄したのよ。真の女王なら、敗北した時にこそ気高くあるべきなのに。そう思わない？

小野 ええ。

藤尾

あたしがあの女優なら、あんな真似は絶対しない。満面の笑みで最高に優雅なパウをしてみせるわ。いいえ、それよりも最初の一人が席を立った瞬間に芝居をやめて楽屋に戻ってやるわ。そこで毒をあおって死んでやる。

間。

小野

なるほど。それでこそまさにクレオパトラだ。

藤尾

(微笑) その時小野さんはなれる？ あたしのアントニーに。

小野

(困惑) さあ。どうでしょう。

「おや、二人ともそちらにいらしたの」と声がしてフランス窓から志

津子が顔を出す。

志津子

お紅茶とケーキ。冷めないうちに召しあがって。

藤尾

あたしたちしばらくここにいなくちゃいけないのよ、糸子さんから

電話番号頼まれて。

志津子

あらそうなの？ じゃちようどよかった。(小野に) ちよつとこの子

に話がありましたね。いえ、すぐに済みますから、小野さんどうぞ

藤尾のお部屋で先に召しあがって。

藤尾

何？ 話って。

志津子

何、大したことじゃないんだけどね。

小野 あ、じゃ僕はあちらで。

志津子 ええ、どうもごめんなさいね。何、すぐに済みますから。

小野、フランス窓から出て行く。

志津子、入れ違いに中へ入ると窓を閉め、小野が去ったことを確かめると、さらにもものしくカーテンを引く。

藤尾 何なのいったい。

志津子 何ってあんた、小野さんのことだよ。あんた、あの人のことどう思ってるの？

藤尾 どうって？

志津子 はぐらかすんじゃないよ。お互い憎からず思ってるでしょう？ 隠し
たってダメよ。

藤尾、タメ息をついてチューナーの音楽を切る。

藤尾 だったら何？

志津子 いい？ 落ち着いて聞いてちょうだいよ。実はね、ちよつと人を使つて調べてもらったの。

藤尾 ? 調べた？

志津子 小野さんってね、どうやら私生児らしいんだよ。

藤尾 え——？（と一瞬絶句）

志津子 そうなんだって。

藤尾 え何それ、調べたって興信所ってこと？ いやらしいのね。

志津子 いやらしいことなんてあるもんですか。普通のことですよ。可哀想にね、ずいぶん苦勞したらしいのよ。小さい頃から親戚中たらいい回しにされてさ。結局最後は京都の金山って在日の人の家で世話になってね。それがまた親切な人もいたもんでさ、赤の他人のその人が学費から何からずーっと面倒を見てやっただけだからさ、泣かせるじゃないか。それで小野さんはああして東大にまで入って、立派に卒業したってことらしいんだよ。

藤尾 へえ。(冷淡)

志津子 それでここからがあたしの見だけでもね。あたしはね、いいと思うんだよ、そういう人でも。あんたさえ気にしないってんならね。

藤尾 何それ。

志津子 それだけをね、ちよつと言つところと思つたの。

藤尾 やめてよ。変なふうに気を回したりしないでよ。あたし別に小野さんと結婚したいとか、そんなこと全然考えてないから。そんなこと一度もお母さんに言つたことないでしょ？

志津子 あんたはそう言うけどね、でもそれじゃ済まないのよ、あんたの場合。合は。

藤尾 どういうこと？

志津子 んもう、わかつてるくせに。甲野の家は普通の家とは違うんですからね。そりゃあたしだってあんたの気の済むようにサ、もう少しゆっく

りと先の話でいいと思ってたけどね。お父さんが急にあんなことになつちまつて、もうそんなふうにも言つてられないじゃないの。

藤尾 兄さんがいるじゃない。

志津子 ダメよ、欽吾なんて。あんなヒッピーみたいになつちやつて、いったいどうする気なのよ。

藤尾 知らないわよ。

志津子 そりゃ本来ならサ、あの子が後を継いでくれりやそれがいちばんだよ？ けどあの通り本人がどうあつてもイヤだつてんだもの、しようがないじゃないの。そこ行くとあんたならあたしの実子だし、結局はあんたが婿を取つて、その人に後を継いでもらうつてのがいちばん丸く納まるんだよ。それともあんたが自分でやる？

藤尾 イヤよあたしだつて、政治家なんて。

志津子 後援会長の大森さんだつてサ、心配して毎日のように見合ひの話を持つてきてくださるんだけど、あんたイヤでしょ、そういうのは。あたしだつてあの人に借りなんか作りたくない。だつたらこの際、小野さんなんて打つてつけじゃないの。ね？

藤尾 やめてつたら。もうそんな話聞きたくない。出てつてよ。

藤尾、イライラと煙草を啜える。

志津子 あらやだ、やめなさいよあんた、女のくせに煙草なんて。

藤尾 別にいいでしょ？ 大人なんだから。（と火を点ける）

志津子 ちよつと。それならあたしにも一本ちようだい。

藤尾 吸うの？ 女のくせにとか言つといて。

志津子 たまには吸いたくなるわよあたしだって、こう気苦労ばかり続くんじやさ。(藤尾の差し出した煙草を見て) あらやだ、フィリップ・モリスだなんて。生意気ねえ。

藤尾 そんなこと言つとあげないわよ？

志津子 いいから、ほら。(火を点けなさい)

藤尾、火を点けてやる。

志津子はソファに腰をおろして、一服する。

志津子 あたしね、かえつてよかつたと思つた。

藤尾 何がよ。

志津子 小野さんがそんなふうな人でさ。

藤尾 まだその話？

志津子 そういふ人ならこつちが上だ。誰に頭を下げることもない。こつちはずっと大いばりでいられるじゃないか。世の中はね、人様に借りを作つたらお終いだよ？ 一生その人への義理に縛られちまうからね。その人の前では一生負け犬でいなくつちやならない。特に政治の世界はそう。

藤尾 不潔だわ。So mean! Ignominious!

志津子 そんなね、きれいごと言えんのは若いうちだけ。不潔だろうと何だろ

うと、それが世の中つてもんだもの。それにサ、いいじゃないかあの人なら。性格も大人しいし。あんなのわがままだつて黙つて聞いてくれるでしょ。結局ね、あんたにやそういう人がいちばんなのよ。小野さんならあたしのことだつてきつと大事にしてくれる。あたしは断然あの人がいいね。小野さんに一票。

藤尾

小野さんは詩人よ？ あたしはそこが好きだったの。でもお母さんの言うこと聞いてたら何だか急に嫌いになつちやつた。

志津子

またそんな、気まぐれなこと言つて。

藤尾

いいえ、この際だからはっきり宣言しとくわ。あたし小野さんとは絶対結婚しないから。

志津子

んもう、あんたもいいかげん大人になつてちょうだいよ。

と、ノックがあつて光江が顔を出す。

光江

お客様です。

志津子

誰？

光江

読者の方です。編集部の方にお会いしたいそうで。

志津子

そ。じゃあたしは行くから。（と立ちあがり）いいね？ とにかくあた

しの考えはそういうことだからね？

志津子、出て行く。

藤尾は不貞腐れたような顔で煙草を消すと、カーテンを開け、デスク

に座って頬杖をつく。

光江、しばらく待っていたが、一向に指示がないので、

光江 あ、お通ししても？

藤尾 (興味なく) ああ、糸子さんがもうじき帰ってくるから、それまで応接間の方で待っててもらえば？

光江 あ、はあい。(と行きかける)

藤尾 あ、ちよつと待って。どんな人？

光江 金山さんっておっしゃる若くてきれいな女の方。京都からいらして、何でも小野さんのお知り合いらしいんですけど。

藤尾 え——？

光江 実は昨日もいらしたんですよ。けどここには誰もいらっしゃらなくて。何でも小野さんの連絡先をお知りになりたいとかって。

藤尾 へえ、その人昨日も来たの。

光江 どうします？

藤尾 いいわ、こっちへお通しして。あ、お茶とかお菓子とかそういうの要らないから。

光江 はい。

光江、去る。

藤尾は立ち上がり、爪を噛みながらしばらく部屋の中を行ったり来たりする。それからフランス窓に行き、自室を見こんでから再びカーテ

ンを閉め、ステレオのチューナーをかける。音楽は短調のアダージョ
(例えばアルビノーニの)に変わっている。

やがて、光江に案内されて金山小夜子が入ってくる。清楚なブラウス
とスカート、春らしい桜色の薄手のカーディガンにハンドバッグ。彼
女はまず部屋の雰囲気に圧倒される。

小夜子 あ の、本当にこちらが？

藤尾 そうよ、ここが『エピタフ』の編集部です。散らかってるけど、ど
うぞお楽になさって。

小夜子 わたくし、京都から参りました金山小夜子と申します。

藤尾 編集長甲野の妹です。今スタッフは取材旅行でちよつと地方へ行っ
てて、あたしが留守を任されています。どうぞ、ここにお掛けになって。

小夜子 失礼いたします。

小夜子は指示されたデスクの椅子に腰かける。藤尾はやや離れて向か
い合う格好で下手の椅子に足を組んで座る。

藤尾 で、小野さんの連絡先をお知りになりたいとか？

小夜子 はい。何度かお電話させていただいたんですけど、ずつとつながら
なくて。それでこうして直接。

藤尾 失礼ですけど小野さんとは、その、どういったご関係で？

小夜子 京都で家族同様に暮らしてた者です。

藤尾は（やはりそうか）と軽く衝撃を受ける。

藤尾

確かに、小野さんは京都の方だつて聞いたことがあるけど——ごめんなさい、これはただ間違いがあっちゃいけないから聞くんだけど、あなたのおっしゃる小野さんと同じ人間だと、どうしてそう？

小夜子

前に創刊号を送ってくれはったことがあって。わたしの好きやったピンクフロイドの歌詞を訳したからつて。

藤尾、さらに小さく衝撃を受ける。

藤尾

そう。へえ、それなら間違いないわね。

小夜子

はい。

藤尾

あ、ごめんなさいね、この部屋ちよつと暗いでしょ？ あたし少し目が弱くて、明るいのが苦手。

小夜子

いえ、大丈夫です。

藤尾

そう。それで？

小夜子

そしたら先週本屋で『エピタフ』の最新号見つけて。それで、こちらで伺えばきっと連絡先がわかると思ひまして。

藤尾

なるほど。（と立ち上がって少し歩き）でも変ね。つまり、家族同様に暮らしてたあなたが、どうして小野さんの連絡先をご存知ではないのかしら。普通は知っているでしょう。

小夜子 ええ——。(固くなる)

藤尾 何かご事情でも？

小夜子 いえ、前の住所はもちろん知ってましたけど、小野さん、半年前に下宿を移られたみたいで。手紙を出しても、転居先不明で戻ってきてしまつて。

藤尾 ということは、本人があなたに転居先を知らせなかったってこと？
そういうことになるわよね？

小夜子 ええ。

藤尾 へえ、どうしてかしら。それは何かこう、あなたに知らせたくない理由があつたつてことなんじゃないかしら。

小夜子 はつらそうにうつむく。藤尾は少し持ち直す。

藤尾 ごめんなさいね、あたしも別に詮索したいわけじゃないのよ？ こういうのつて本人がいらつしやれば話は早いんだけど、ほら、他人が不用意に教えたりして後で小野さんに恨まれても困るじゃない？

小夜子 (うなづく) そうですね。

藤尾 (苦笑して見せて) 何かさ、刑事が尋問してるみたいであたしもこんな柄じゃないんだけど。

小夜子 すみません、おたく様にはただご迷惑なことで。

藤尾 ううん、それはいいのよ全然。ただ、どうしてかなつて。

小夜子 小野さん、たぶん困つてはるんやと思います。父が——。(と再びう

つむいてしまう)

藤尾 あなたの父様が？（と促す）

小夜子 以前に、その、手紙に変なことを書いたから。

藤尾 変なことって？

小夜子 その、結婚の日取りを、早く決めてくれみたいなことを。

藤尾 結婚？——結婚で、小野さんとあなたなの？

小夜子、恥ずかしそうにうなづく。

藤尾は思わず笑ってしまう。

藤尾 あ、ごめんなさい。ふふ、あたしそういうご関係だとは全然知らなくて。

小夜子 いえ、わたしも小野さんも、別に、そんな確かな約束をしてたわけやないんです。ただ、父がひとり合点にそう思い込んでしまつてて。

藤尾 へえそう、お父様が。

小夜子 それで、小野さんはどう返事したらいいかわからなくて、たぶん困つてはるんやと思うんです。

藤尾 あ、わかった。きつと小野さんはあなたのお父様にはたいへんお世話になつたのね？ そうでしょう。

小夜子 ええ、まあ。

藤尾 そうかあ。それじゃまあ断るにしても無下には断れないもんねえ。

小夜子、つらそうにうつむく。藤尾はますます愉快になってくる。

藤尾 あ、ごめんなさいね、無神経なこと言っちゃって。それじゃ単純に小野さんはまだ結婚なさりたくないってことなのかしら。それとも、こっちで誰か他の女性とおつき合いなさってるとか？

小夜子 それはわかりません。そういう方がいっても別に不思議やないと思います。もう五年になりますし。

藤尾 わかった。それでとにかくあなたとしては、小野さんのお気持ちを確かめたいわけね？ わかるわあ、それは気になっちゃうわよねえ。

小夜子 いいえ、そういうことやないんです。

藤尾 ? 違うの？

小夜子 はい。

藤尾 じゃ、あなたはもう小野さんのことが好きじゃないってこと？

小夜子 そうではなくて——その、父がそんな手紙を書いたのには少しわけがあるんです。

藤尾 Ah Hah.

小夜子 実は——もう永くはないかも知れなくて。

藤尾 え？

小夜子 去年の秋口に、胃に癌が見つかって、三分の二を切除したんです。

藤尾 まあ——それはお気の毒に。

小夜子 それで、気が弱くなって、急にそんな手紙を書いたんやろうと思います。

藤尾 お父様は、今は？

小夜子 退院して何とかやっておりますけど、先月、転移が見つかって、今は京大病院に通って放射線の治療を。

藤尾 そう。

小夜子 そのことを小野さんはまだご存知やないと思うんです。もし——万が一このままいうことになったら、もちろん父も可哀想ですけど、小野さんもきつと後悔しはるやろうなって思うんです。そう思ったなら、もう居ても立ってもおられへんようになって、それでこんな所まで。ごめんなさい。

間。藤尾の顔から表情が消える。

藤尾 わかりました。あたしが教えてあげられたらいいんだけど、生憎あたしも知らなくて。スタッフに伝えてすぐにご連絡さし上げるようにいたします。

小夜子 どうかよろしくお願いいたします。(立ち上がってハンドバッグから紙片を出し)明日の朝十時まではこちらの本郷の旅館にあります。下が京都の住所と電話番号です。

藤尾 お預かりします。(と受け取る)

小夜子 それでは、ごめんください。

小夜子、一礼して出て行くとする。

藤尾 ねえ。

小夜子 はい。

藤尾 あなたはまだ小野さんのことが好きなのよね？ それとももう？

小夜子 ー。

藤尾 や、もしかしたらここで小野さんに会うこともあるかも知れないし。

もし聞かれたら何て言えばいいかなって。

小夜子 わたしの気持ちは五年前から変わっていません、と、そう。

藤尾 I see.

小夜子、目礼して出て行く。

一人になった藤尾はおもむろにチューナーの音楽を切ると、カーテンと窓を開け、紙片を丸めて外に投げ捨てる。それから苛々と煙草を啜えて火を点けようとするが、ライターのがスが切れている。彼女は煙草も投げ捨て、ステレオに戻ってデヴィッド・ボウイの新譜『アラジン・セイン』をターンテーブルに載せ、いかげんに針を落としてボリュームを上げる。『夜をぶつとばせ』（B面3曲目）がちょうどイントロの辺りから大音量で流れ出す。彼女はその音楽に合わせてしばらく一人で狂ったようにゴーゴーのようなものを踊る。サビの辺りでぴたりと踊るのをやめると、ステレオをそのままにしてフランス窓から出て行く。

無人の部屋で、しばらくボウイの歌が大音量で流れている。

と、電話が鳴る。

三回ほどベルが鳴った辺りで糸子が帰ってくる。彼女は電話が鳴っているのに気づくと、大急ぎでステレオのボリュームを下げて電話に出る。

糸子

(電話に) ハイ、『エピタフ』編集部です。——あ、お兄ちゃん？ よかったあ連絡取れて。ねえ、いつこつちに戻ってくるの？——うん、すぐたくさん来てるよ、感想とか、バックナンバーの注文とか。——うん、投稿原稿もいつもの三倍か四倍くらい。どれ載せるか早く決めてほしいのよ。——そうだよ、じゃないとあたしまた徹夜続きになっちゃうもん。知らないよ、可愛い妹が倒れても。あ、ねえねえ、そんなことより知ってた？ 藤尾さんと小野さんがつき合ってるって。——本当よ。だって藤尾さんがさつきそう——(と何気なく窓から外を見て思わず息を呑む。再び電話に戻って)——ど、どうしようお兄ちゃん、今あたし見ちゃったよ、二人が抱き合ってキスしてるって。

『夜をぶつとばせ』のコーダ部分十六秒とともに急速に——幕。

(第一幕の終わり)

「第二幕」

1

同年。七月の初めの午後。

外は雨だが、今は窓もカーテンも閉まっていて、ステレオからはタンジェリン・ドリームの『アルファ・ケンタウリ』が流れている。

デスクの上に『エピタフ』最新号（第六号）の小包が置かれていて、取り出された一冊がその横に読みかけのまま伏せてある。

ジーンズにサイケなシャツで頭に手ぬぐいを巻いた欽吾が床に座り込んで、扇風機に当たりながら父の肖像を見上げている。
と、ノックの音。

欽吾、大儀そうに立ち上がってレコードを止め「どうぞ」と応える。

宗近と糸子が入ってくる。宗近は相変わらすのジーンズに素足、絞り染めのTシャツの左袖を捲り上げてハイライトの箱を挟んでいる。糸子もトレードマークの野球帽とオーバオールにボーダーのTシャツ姿で、ハンカチで包んだタツパウエアを持参している。

宗近 うわ、むっとしてんなあ。

甲野 よお。

宗近 寝てなくて大丈夫なのか？

甲野 寝てるのも厭きちゃったよ。熱もだいぶ下がったし。

糸子 何度？

甲野 七度一分かな。

糸子 まだ高いじゃない。

甲野 もうほとんど平熱だよ。

糸子 ならせめて少し換気しないと。今日は雨降ってるからだいぶ涼しいよ。窓開けても平気？

甲野 うん、悪いね。

糸子がカーテンを開ける。

宗近 糸公が牛乳寒天作ってきた。蜜柑が入っててけっこう美味いぜ。

甲野 ああ、それはどうもありがとう。

宗近 (デスクの上を見て) お、最新号できたのか。

甲野 ああ、さつき印刷所から届いた。

宗近、デスクに座って最新号をパラパラと見る。

窓が大きく開いて、しとしとと雨の音が流れ込んでくる。

糸子 あら、藤尾さんの部屋もカーテンが閉まつてる。こんな雨の日にお出かけ？

甲野 昨日からニューヨークだよ。

糸子 わあいいなあ。

宗近 そういや小野とはもう正式に婚約したのか？

甲野 さあな。でも近いうちにする気なんだろう。小野も一緒に連れてっ

たから。

宗近 (驚く) ニューヨークへか。

甲野 試験が終わったお祝いにとか言っつてな。おふくろが飛行機代を出してやったそうだ。

宗近 へえー、そりやまた豪勢な婚前旅行だ。

糸子 素敵ね、二人でニューヨークかあ。

甲野 そうでもないさ。藤尾の見栄だよ。小野もいい面の皮だ。

宗近 どういうこと？

甲野 あいつさ、昔のボーイフレンドに今でも未練があるんだよ。

糸子 あら、ロボット・レッドフォードに似てる人？

甲野 どうだったかなあ。(苦笑)

糸子 だって言っつてたわ。

甲野 まあ似てるかどうかは主観の差だけど、たぶんあいつはそのボーイフレンドに逢いたくって行ったんだと思う。だから小野なんていわばアクセサリーみたいなもんだよ。

宗近 アクセサリーって？

甲野 つまり自分にはちゃんと新しい崇拜者がいるってとこを昔の男に見せつけたいんだよ。そうやってもう一度相手の歓心を買おうって魂胆なんだ。ま、あいつの考えそんなことだよ。

糸子 そんな。いくら欽吾さんでもそんな言い方ってひどいわ。それは誤解だと思わ。

甲野 誤解？

糸子 だって小野さんと藤尾さんのお二人は、ちゃんと真剣に愛し合ってるんですから。あたし実際にこの目で見たもの。(と少しムキになる)

短い間。

甲野 ふふ、ごめん、そうだったね。謝る。僕が悪かった。(と頭を下げる)

糸子 や、あたしはそんな。

甲野 きつと熱のせいだな。考えることが意地悪になってる。

糸子 寒天すぐ食べる？

甲野 今はいい。後でいただくよ。

糸子 じゃちよつと光江さんに預けてくるね。

甲野 ありがとう。あ、糸ちゃん。

糸子 何？

甲野 本当に嬉しい。それ大好物なんだ。

糸子 (微笑) 知ってる。兄さんから聞いてたから。

糸子、ハンカチの包みを持って出て行く。

宗近 煙草いいか？

甲野 平気だ。吸ってくれ。

宗近、Tシャツの袖からハイライトを取り出し、一本啜えると窓際へ

行って火を点ける。

甲野 糸ちゃんはいいい人だね。

宗近 そりや俺の妹だからな。人間が上等にできてんだよ。

甲野 自分まで上等にしたな？

宗近 ハハハ。

甲野 でも残念ながらさっき言ったことは本当だよ。小野も可哀想にな。藤尾と結婚しても幸せになんかなれっこないのに。

宗近 そんなのわからんさ。案外割れ鍋に綴じ蓋ってこともあるぜ？

甲野 人から満たされることだけを望み、人を満たすことは決してしない。そういう人間っているもんだよ。藤尾なんかその典型的なタイプだ。

宗近 ー。

甲野 俺にも少しそういうところがある。こういうのってきつと生まれつきでね。きつと死ぬまで変わらないのだろうな。

宗近、ステレオの側に行く。

宗近 何聴いてたんだ。誰かの新譜か？

甲野 いや、タンジェリン・ドリームの古いやつ。

宗近 (ジャケットを見て) あー俺の苦手なやつだ。いまだに何がいいのかさっぱりわからん。

甲野 ちようどいいんだよ、ぼんやり考え事する時には。

宗 近　へえ。何考えてたんだ。

甲 野　まあいろんなことをとりとめもなくさ。親父のこととか。

宗 近　そうか。——そういや親父さん、もう半年経ったんだな。

甲 野　うん。

雨の音——。

甲 野　あの日さ。

宗 近　うん。

甲 野　俺が大学中退するって言ったたら、親父のやつ妙に物分かりよかったじゃんか。

宗 近　（苦笑）急に酒飲もうなんか言い出してな。

甲 野　あれさ、たぶん前から決めてたんだと思う。俺がそう言い出したたら、その日は飲みながら話をしようって。

宗 近　あーそうかもな。何だか、もつと話したそうな雰囲気だったもんな。

甲 野　この部屋まで乗り込んできてな。

宗 近　（苦笑）そうだった。

甲 野　あの日、親父が本当は何を話したかったのか——俺に何を伝えようとしてたのか——結局、聞かずじまいのままになっちゃった。

宗 近　そうだな。——けどまあ仕方ないよ。大きな宿題とでも思うしかない
ころ。

甲野、ライティングデスクへ行き、自分のノートを取り出す。

甲野 漱石の「悲劇は何ゆえ偉大なのか」って命題を覚えてるか？

宗近 何だっけ。『虞美人草』？

甲野 その最後に出てくる。

宗近 高校の頃おまえに言われて読んだけど、まったく覚えてないよ。

甲野 さつき書き写してみた。（と開いたノートを差し出す）

宗近 ヒマ人オールザピープルかよ。（と煙草を消し）どれ。（と受け取って読む）「悲劇は——忽然として生を変じて死となすが故に偉大なのである。忘れたる死を不用意の際に点出するから偉大なのである。ふざけたるものが急に襟を正すから偉大なのである」——うーん、確かにな。おじさんが急にあんなことになって、俺もちよつと襟を正すような気分にはなったな。

甲野 うん、そりゃ俺だってそうさ。でも俺が言いたいのはそのような小乗的なことじゃなくてもつと大乘的な、大きな意味だよ。

宗近 大きな意味とは？

甲野 つまりさ、親父たちの世代は国家的な悲劇を実際に体験したわけじゃないか。

宗近 戦争ってこと？

甲野 ていうより、その終着点たる壊滅的な大敗北だな。戦争そのものはどっちかといえど喜劇だよ。

宗近 うん。それで？

甲野 だから親父たちの世代は、あの戦争に負けた時に、何ていうか、全員が一度ちゃんと襟を正したんだと思うんだ。

宗近 ふざけたるものが急に襟を正したわけだな？

甲野 そう。そうやって全員が襟を正したところから、良くも悪くもこの戦後の日本という国を始めたわけだよ。

宗近 話がでかいな。

甲野 もしかしたらあの日、そんなことを俺やおまえに話しておきたかったのかも知れない。

宗近 あー。

甲野 何かふつとそんな気がしてさ。

宗近 そういうことかよ。(続きを読む) 「ふざけたるものが急に襟を正すから偉大なのである。人生の第一義は道義にありとの命題を脳裏に樹立するが故に偉大なのである。道義の実践はこれを人に望むこと切なるにもかかわらず、われのもつとも難しとする所である。悲劇は個人をしてこの実践を敢えてせしむるが為に偉大である。道義の実践は他人にもつとも便宜にして、自己にもつとも不利益である。人々力をここに致すとき、一般の幸福を促して、社会を真正の文明に導くが故に、悲劇は偉大である」——なるほど。みんな等しく一度はそういう気分になったってことだよな、戦争に負けた時に。

甲野 実際みんなが等しくかどうかはわからんけどもな。ただ、たとえば親父は戦後すぐに外交官を辞めて政治家になった。その辺りの心境の変化というか、思いといったものを、俺はこれまでじっくりと聞いた

ことがなかった。正直こっちはあまり聞きたいとも思わなかったしな。戦前とか戦時中に、親父がどんなこと考えてたのかってこととかも。

宗近 うん。

甲野 だから、もしかしたらそんな話をさ、あの日の親父は俺たちに、ちよつと語っておきたかったんじゃないかって、どうもそんな気がするんだよな。

宗近 そういや俺も、親父が満映にいた頃の話なんてほとんど聞いたことないな。

甲野 聞いた方がいい。俺みたいに手遅れにならないうちに。

宗近 でもなあ。何ていうか簡単に聞けないって雰囲気もあるんだよなあ。一度だけさ、一緒に飲んでる時にポロっと、甘粕理事長が自殺する朝に普通に挨拶したって話を聞いたことがあつてさ。

甲野 へえ、どんな話？

宗近 や、本当にただそれだけの話。朝、撮影所の門で行き会ったから「お早うございます」って声かけたら、向こうも普通に「お早う」って応えてくれたっていう。

甲野 へえ。

宗近 でもさ、甘粕ついでいやアナキストの大杉栄なんかを虐殺した張本人なわけだろ？ だから、そもそもそんないわくつきの人間がどうして満映の理事長になれたんだって聞いたんだよ。いや話の流れで何気なくだよ？ そしたら親父のやつ、急に困ったような顔してジッと黙り込ん

じまつてな。最後にようやく、俺にもわからんのだからそういうことは聞かないでくれって。

甲野 そうか。

宗近 何か、自分の中でまだいろんな整理がつかんのか、それとも家族にも言えないような、何かよっぽど嫌なものを見聞きしたのか。その辺のことは全然わかんないんだけどさ。何だかあんまり触れちゃいけない感じなんで、俺もあえて聞かないようにしてるってとこあるんだよな。

甲野 ふーん。なるほどな。

宗近 うん。

雨の音――。

甲野 なあ。

宗近 ん？

甲野 俺たちの世代も、いつか全員で襟を正さなきゃならんような、そんな悲劇を体験する日が来るのかな。

宗近 さあどうだろう。

甲野 その時、俺たちはどうするんだろうな。

宗近 さあな。でもそんなの考えたって仕方ないよ。

甲野 そうだろうか。

宗近 考えてみたってわかることじゃなし。来たら来た時のことだよ。

甲野 ふ、呑気だな。日本の将来の運命とか考えたりしないのか？

宗近 しないね。だいたい運命みたいなもんは神の考えることだよ。人間は人間らしく働いてりやそれでじゅうぶんだよ。

甲野 人間は人間らしくかあ。

宗近 そうよ。時世時節（ときよじせつ）は変わるとままよ。

甲野 ふ、宗近一は男じゃないかってか？

宗近 そういうこと。

甲野 ふふ、負けるよおまえには。

二人は静かに笑い合う。

宗近 それにしても糸公のやつ戻ってこないな。何してんだろ。

甲野 光江さんとおしゃべりでもしてんじやない？

宗近 あ、来た。

笑い声が聞こえ、糸子がドーナツの入った菓子鉢を持って戻ってくる。

糸子 珍しいお客さんよ。誰だかわかる？

宗近 え、誰だよ。

続いて浅井が盆に載せたカルピスを運んでくる。

浅井 はーい、カルピス四つお待たせいたしましたア。

宗近 うお何だよ、浅井か。

甲野 へー変わったなあおい。

二人はげらげら笑い出す。浅井は髭も落としてきれいな七三分けで襟の大きな背広に太いネクタイを締めている。

宗近 ヒー何だよその恰好。もうすっかりエコノミック・アニマルじゃんか。

浅井 君らに笑われる筋合いはないぞ。世間じゃこれがまっとうな社会人だよ。

甲野 どうしたんだよ今日は。

浅井 いや営業で近くまで来て時間が空いたからさ。ま、陣中見舞いに。

糸子 ほらこれ。ダンキン・ドーナツいただいたのよ？

宗近 おー。(とさっそく一つ摘まんで) 営業つて？ 何売ってんだよ。

浅井 うちの専門商社だからコークス一本だよ。

甲野 コークス？

糸子 コーラのこと？

浅井 んなアホな。

宗近 あの石炭から作るやつか？ コークスのことなんか人生で一度も考えたことないぞ。

甲野 俺もない。

浅井 おいおい、日本は小資源国家なんだぞ。こう見えてもその辺の同世代よりずっと大きな仕事してんだぜ？

糸子 お仕事楽しい？

浅井 まあ親戚のコネで厭々入った会社だったけどね、やってみると案外向いてたみたいで。入社三ヶ月で二千万の商談まとめた新人は初めてだって言われたよ。

糸子 へえすごい。

宗近 じゃ君、『エピタフ』にもいっちょ出資してくれたまえよ。

浅井 ロックじゃ無理だな。コークス業界のPR誌作るんなら今日中に百万出すスポンサー見つけてやるけど。

甲野 音楽は？何か聴いてるか？

浅井 いやー全然だね。やっぱなかなか時間がなくて。

宗近 ツェッペリンとクリムゾンとフロイドのニュー・アルバムだけは必聴だぞ。

甲野 フェイセズにイエスのライブ盤に、あとパールの新しいのも悪くないよ。

浅井 うーん、上司が取引先がファンだったら聴くけどな。最近はおっぱらぴんから兄弟と殿様キングスだな。

宗近 うわダメだぞこいつ、墮落の極みだ。

浅井 おい、そんなことより小野のやつ藤尾さんと一緒にニューヨークだつて？すごいじゃないか。正式な婚約も近いんだって？

甲野 まあそういうことになるらしいな。

浅井 ちくしょう小野のやつ上手いことやりよったなあ。大出世じゃない

か。なあ。だってあれだろ？ 甲野が継がないんなら、将来は小野が親父さんの地盤とか看板を継ぐことになるんだろ？

甲野 なるかもな。小野にその気があるんなら。

浅井 そりや大ありだぞあいつ。おっとりしてるように見えて内心は立身出世の鬼みたいなところあるからな。まあいろいろ苦労したやつだからわからんでもないけど。

宗近 竹馬の友としちややつぱめでたいことかね。

浅井 そりやそうだよ。同級生が与党の政治家となりやこの先何かと心強
いじゃないか。世の中そういう知り合いがいないとじゃ大違い
だからなあ。

宗近と甲野、顔を見合わせる。

宗近 だそうじゃ。よかったのうワシらも知り合いで。

甲野 いと心強しなのじゃ。

と、電話が鳴る。

浅井 お、いっばしに電話があるじゃないか。

糸子 (電話に出て) ハイ、『エピタフ』編集部です。——あ、どうもいっ
もお世話になってます。

浅井 電話代どれくらいだ。

甲野 さあ考えたこともない。

浅井 俺なんか月に五万は軽く行くよ？ デスクに各自の専用電話があるんだけど、先輩で月に十万超える人もいる。

糸子 (電話に) え？ それはどういうことでしょうか？——ハイ。——ハイ——。

宗近 何をそんなにしゃべんだよ。

浅井 そりゃだって国際電話もあるしさ。とにかく仕事の半分は電話とテレックスだよ俺たち商社マンは。

糸子 (電話に) えッ？ そうなんですかッ？

糸子が急に大きな声を出したので一同はそちらに注目する。

糸子 (電話に) それでいったいどうすればいいんでしょうか。——ハイ。——ハイ。——わかりました。すぐに伺いますので。——ハイ、ごめんください。

糸子、真っ青な顔になって電話を切る。

宗近 どうした。何かあったのか？

糸子 東販さんから今日納品された第六号の雑誌コードが違ってますって。

宗近 え？

甲野と宗近、慌てて最新号の裏表紙を確かめる。

糸子 ごめんなさい、あたしが打ち間違えたんだわ。このままだと『エピ

タフ』の売上が全部他の会社に行っちゃいますよって。

宗近 ええッ？

浅井 おやおや。

糸子 ごめんなさい、あたしちよつと行ってきました。

宗近 行くつてどこへ。

糸子 取次さんの倉庫。本当は正しいコードを印刷したシールを上から貼るのがいいらしいんだけど、間に合わないなら全部マジックで消してくださいって。

宗近 わかった、俺も一緒に行く。

甲野 俺も行くよ。

宗近 おまえはいいよ、まだ熱があるんだから。

甲野 いやもう平気だよ。

糸子 お願い、欽吾さんは休んで。これはあたしのミスだもん。あたしと兄さんで何とかするから。

甲野 いや、糸ちゃんのせいじゃないよ。いつも徹夜続きにさせてる俺たちが悪い。

宗近 そうだけど。大丈夫か？

甲野 平気だって。人数は一人でも多い方がいい。全部で一万部だぞ。

宗近　じゃ浅井、おまえもつき合え。

浅井　悪いな。俺これから大事な商談があるから。

宗近　じゃせめて時間が許す限りここで電話番号しててくれ。他の取次からも掛かってくるかも知れんから。

浅井　いいよ。あと三十分くらいなら。

糸子　（浅井と甲野に）ごめんなさい、本当にごめんなさい。

宗近　いいからもう。さあ早く行こう。

三人、慌ただしくバタバタと出て行く。

一人残った浅井は「やれやれ」と呟き、ポケットからチェリーを取り出してライターで火を点ける。それからデスクの椅子に座ると、おもむろに最新号を手にとって、しばらくパラパラとめくってみる。やがて興味なさそうにデスクの上に放り出すと、煙草を消して「さて」と言いながら立ち上がったところに、ノックがあつてドアが開き、志津子が顔を出す。

志津子　出かけたみたいだね。

浅井　ええ。何か印刷ミスがあつたみたいで、みんなでそれを直しに。

志津子　そう。

浅井　あれはどうぶん帰ってきませんよ。

志津子　じゃおあつらえだね。（と部屋に入って戸を閉める）もうここで済ませちゃいましょうか。あんまり人に聞かれたくない話ですからね。

浅井　　ですね。じゃこつちで。（とテーブルを指す）

浅井と志津子はテーブルの椅子に掛ける。

志津子　（改まって）どうも今日はわざわざ。

浅井　　いえ、他ならぬ小野君のためですから。

志津子　それじゃさっそくなんですけどね、その京都の小夜子さんて方のごとなんですけど。

浅井　　ええ。

志津子　最初に確かめておきますけど、その、本当に小野さんとは何でもないんですね？

浅井　　ええ、電話でもお話しましたが、交際といってもまあ高校時代の話ですから。

志津子　本人もそうは言ってたけど。

浅井　　何もありませんよ。あの頃の小野君はそういう方面は奥手な方でしたから。せいぜい手をつないだとか、よくてファーストキスを交わしたとか、まあそんな程度のことでしょう。

志津子　でもほら、そんなふうにカッとのぼせちまってる時には、何ていうのかしら、勢いでよく将来のことなんかを。

浅井　　それも大丈夫です。そんな約束は一切ないと、この正月にここではつきりそう言っていましたから。

志津子　本当に？

浅井 ええ。まあ淡い初恋の思い出といったくらいで、今ではお互いに恋

愛感情なんてのもないでしょう。

志津子 じゃあまったく先方のお父さんだけが、そう思い込んじゃまってるってことなんですかね？

浅井 そういうことでしょうか。金山さんというのは伏見で家屋解体業を手広くやってはる人で、篤志家でなかなかいい人なんですがね。

志津子 ええ。

浅井 まあこんな言うたらあれですけど、あんまり学のある人ではないんで、その頃の二人を見ててすっかりそのつもりになっちゃったんでしような。何、大丈夫ですよ、僕が行ってきちんと誠意をもって話してきますから。そうすれば分かってくれますよ。

志津子 ごめんなさい、あなたにはとんだご面倒をおかけするわね。

浅井 いいえ、僕はお役に立ててかえって嬉しいですよ。それにこれは先方にとっても決して悪い話じゃないですから。小野君の支援者としてこちらとご縁ができることは、この先のことを考えればかえって幸運なことでしょう。

志津子 あなたにそう言ってもらってやっとホッとしましたよ。小野さんから暗あい顔で打ち明けられた時にはホントにねえ、もうどうしようかと思いましたが。小野さんは？ あれから何かおっしゃって？

浅井 一昨日の夜電話で話しましたがね。くれぐれもよろしく頼むと蚊の鳴くような声で言うから、任せとけ、万事うまくやってやるから心配するなど言ってやりましたよ。(笑う)

志津子 そう。ではこれ、持ってってください。（と袂から封筒を取り出して）

とりあえず二百万入ってます。

浅井 ほう。

志津子 何も正式な約束があったって話じゃないんだから、慰謝料っていう

アレでもないんだけど、まあそれでもねえ、お気持ちのお納め料ってことで。

浅井 それは向こうも喜ぶでしょう。あつて困るものではないですからね。

しかしこんなに要りますかねえ。

志津子 いいえあなた、こういうことでケチだと思われちゃ甲野の家が恥を

かきますもの。出さなくてもいいところをこれだけ出すから人に一目置いてもらえるんです。

浅井 なるほど。勉強になります。では、確かにお預かりいたします。（と

内ポケットに入れる）

志津子 それで、いつ行ってくださる？

浅井 早い方がいいでしょうから、今度の休みにでもさっそく。

志津子 そう、悪いわねえ。

浅井 それじゃ、僕はこれで。（と立ち上がる）

志津子 どうぞ、よろしくお願いいたしますわね。

志津子、浅井を送って戸口まで歩き、

志津子 おっと、肝心なものを忘れるところでしたよ。（ともう一つ封筒を出し

て)こっちはあなたへの謝礼です。申し訳ないような額だけど、三十万
で。

浅井 やあこれはどうも。助かります。

浅井、封筒を受け取ってにっこり笑う。

キング・クリムゾンの『イージー・マネー』とともに溶暗。

2

二週間後、七月下旬の夕刻。

窓が開け放たれている。外からジーツというアブラゼミの鳴く声。

白い洒落たスーツを着込んだ小野が憂鬱そうな顔で窓辺に立っている。

やがて意を決したように電話の所へ行き、受話器を取り上げるが、結

局ダイヤルに指をかけずに戻し、深いタメ息をつく。

そこへ麦茶を盆に載せて光江が入ってくる。

光江 どうもご退屈様。

小野 あ、どうも。

光江 藤尾さん、まだしばらくお支度にかかるみたいですよ。(と麦茶をテ
ーブルに置く)

小野 そうですか。

光江 この度はおめでとうございます。

小野 え？

光江 だって今日で正式な婚約ということになるんでしょ？

小野 どうか。その大森さんて方のお眼鏡に叶えばということらしいけど。

光江 大丈夫ですよ。後援会長との会食なんて、ただの儀式みたいなもんだって奥様もそうおっしゃってたじゃありませんか。ねえ、それよりそのお洋服。

小野 え？

光江 やっぱり藤尾さんのお見立て？ ね、そうでしょ。

小野 ええまあ。

光江 (感じ入って) はー、やっぱりセンスが違うのよねえ。ね、そういうのってどこで買いになるの？

小野 青山にある、あの人の知り合いのブティックで。

光江 (ますます感じ入って) はー、知り合いの、青山の、ブティック！

小野 あの、甲野君は？ いると思っただのに。

光江 ああ。昼からちよつと病院に。

小野 病院？

光江 夏風邪がなかなか抜けきらなくて。この一週間ばかり、だんだんとひどい咳も出るようになって。それでお昼前に糸子さんが無理やり引っ張っていったんですよ。

小野 へえ、大丈夫なのかな。

光江 まあ今どき肺病なんてこともないでしょうけど。ほら、欽吾さんて

昔から大の病院嫌いだから。

小野 そうなんだ。

光江 だいたい生活が不規則でしょう？ 寝る時間だつてもう滅茶苦茶で。いくら周りがそう言ったって全然聞かないんだもの。あれじゃ治るもんも治りませんよ。それでどうとう糸子さんが見るに見かねて。

小野 そう。

光江 でも不思議と糸子さんの言うことだと素直に聞くのよねえ。うふふ、これね、藤尾さんから聞いた話なんですけど。

小野 ええ。

光江 糸子さんて中学生の頃から欽吾さんのことが好きなんですって。

小野 へえ。

光江 それがね、近頃じゃ欽吾さんの方もまんざらじゃないみたいだって。これはひよっとするとひよっとしますよね。

小野 え？

光江 やあねえ、そのお二人も結婚するかも知れないってこと。

小野 ああ。

光江 そうなったら面白いですよ。欽吾さんが小野さんの義理のお兄さんで、そのまた義理のお兄さんが一さんでことになるでしょう？ 何だかみんなそろって親戚同士になるなんて、ちょっと楽しいじゃありませんか。

小野 ——。(心ここにあらずの顔)

光江 ねえ？

小野 え？

光江 そう思いませんか？

小野 あ。ああ、どうだろうな。何だかあまり実感がわかないけど。

光江 ふふふ、もお大丈夫ですって。大森会長は気のいい方だからそんなに緊張なさらなくても。それじゃ、ま、どうぞごゆっくり。

小野 どうも。

光江、出て行く。

小野は椅子に腰をおろし、両手で顔を覆ってしばし苦悶の体。やがて決意の顔で再び電話に向かい今度はダイヤルを回し始める。しかし、やはり途中でやめてしまう。続いて内ポケットから手帖を出し、それを見ながら今度は別の番号にかけ、しばし待つ。

小野 (電話に) あ、僕や。浅井？——あ、すみません、あの浅井君は？—

—あ、僕は彼の友人で小野と申しますが——はあ、そうですか。それなら結構です。——ええ、伝言も特に。どうも。失礼します。

小野、受話器を置き、フーツと再び深いタメ息をつく。

と、応接室のドアが開いて、宗近がぬっと入ってくる。

宗近 よお、やっと会えた。

小野 (驚いて) え？ ずっとそこに居たの？

宗 近 いや今来たところだ。応接室の方から入ったんだ。

小 野 何で。

宗 近 あとで話すよ。試験が済んだそうだな。結果は？

小 野 まだ。発表は九月だから。

宗 近 そうか。ニューヨークはどうだった。ジョンとヨーコ見かけたか。

小 野 (苦笑) さすがにそれはないけど、でも、自分があの町を歩いているって現実感があんまりなくて。まるで映画を観てるような気分っていうか。

宗 近 ふーん。

小 野 ごめん、我ながらつまらない感想だね。これじゃ中学生以下だ。

宗 近 いいさ。俺だって初めて行きやきつとそんなもんだ。ところで昨日の昼間、偶然浅井と会ったよ。

小 野 え、どこで？

宗 近 新宿。紀伊國屋の地下でカレーを食おうとしたら隣が偶然浅井だった。

小 野 へえ、そんなこともあるんだね。

宗 近 時間があると言うから一時間ばかりカトレアでお茶を飲んだ。そこで京都の金山さんの話を聞いたよ。

小 野 え？

宗 近 そのことで話そうと思ってすぐに君の下宿へ行ったんだが、君、昨夜は遅かったろう。

小 野 昨日は青山の方に出かけて、夜はそのまま食事に行ったから。(不

安になつて）話すつて何を？

宗近 その金山さんという人、そういうことなら金輪際君との縁を切ると言つて金品も受け取らなかつたそうだな。

小野 （うつむいて）そんなことまで。

宗近 浅井のやつ、何でもつたいないことをする人だ、愚かな人物だときかんに非難しとつたが、僕はそうは思わん。だからここはどうあつても君と話さなくちやいかんと思つた。君、どうして自分で京都に行かなかつたんだ。なぜ浅井なんかを代理で行かせた。

小野 話しても——きつとわかつてもらえない。

宗近 わかるかわからんかは聞いてからのことだよ。まず君の言い分を聞こう。

小野 言い分も何も——。

小野、しばし迷つた挙句、あきらめたようにタメ息をつく。

小野 いいよ、話そう。その金山さんというのは僕の生涯の恩人だ。僕はこの先一生かけてもその恩に報いなくちやならんと思つてる。

宗近 うん。

小野 しかし結婚のことは別だよ。勝手に決められても困る。それは僕個人の問題だからね。

宗近 それはわかる。

小野 でもそれを面と向かつて伝えたら、金山さんの心を傷つけることに

なる。君は知らないだろうけど、けっこう起伏の激しい人なんだよ。たぶんお互い感情的になって、とても冷静には話せないだろう。だから浅井に間に入ってもらったんだ。

宗近 肝心の小夜子さんのことは？ どう思ってたんだ。

ずけずけと入ってくる宗近に小野は少しムツとする。

小野 悪いけど、何でそれを君に。

宗近 大事なことだからだ。どう思ってる。

小野 どうって、そりや今だって好きだよ。けど結婚とかそういうことは、もっとお互いゆっくり時間をかけて考えるべきことだと思ってた。それを父親の方から、いつ式を挙げるんだとかって、あんなふうに急に迫ってこられても。

宗近 そりや困るよな。そんなことがあったら僕だって困る。

小野 だろ？

宗近 それでぐずぐずと返事をしないでいるうちに、藤尾さんとの恋愛が始まっちゃまったというわけだな？

小野 まあそうだけ——はたしてあれが恋愛といえるかどうか。

宗近 妹はそうだと言ってたぜ。

小野 あの人は恋愛というより、何だか一方的に引き回されてるって感じかな。でも構わないよそれで。恋愛と結婚って別のことだからね。

宗近 小夜子さんが藤尾さんと会ったって話は？

小野 聞いたよ。

宗近 俺も驚いたが、小夜子さん、一度ここへ訪ねて来たそうだな。

小野 そうだったね。本人がそう言ってたと浅井から聞いて、僕もびっくりした。

宗近 ということはつまり、藤尾さんからは聞いてなかったってことか。

小野 うん。聞いてはなかった。

宗近 ふむ、やっぱりそうか。それで、君はそのことで藤尾さんと話しかい？

小野 いや。

宗近 なぜ。

小野 今さら蒸し返したって仕方ない。もう何か月も前のことだよ。

宗近 しかし君はこれから彼女と結婚しようってんじゃないか。

小野 だからよけいにさ。あの人にだってあの人なりの理由があつてのとだろう。それをいちいち暴き立てるようなことはしたくない。

宗近 おい、ふざけちゃいかんぜ。金山さんの病気のことも君に知らせなかつたんだぜ？

小野 ー。

宗近 よし、藤尾さんとは話さんでもいい。それなら君はなぜすぐに京都に飛んで行かないんだ。何をおいてもすぐに行かなきゃいかんだろ。

小野 ー。

宗近 おい小野。

小野 君にはわからないよ。

宗近 何がだよ。

小野は窓辺に立って外を見る。

宗近 どういうことだよ。

しばしの沈黙。

小野 僕な。(と以降は京都訛りとなる)

宗近 うん。

小野 ずっと君が羨ましかった。

宗近 ? どういう意味だよ。

小野 だって君、いっつも堂々としてるやんか。

宗近 そうか?

小野 何や知らん泰然としとって、いつもええなあって思うてた。

宗近 ふーん。

小野 生まれてこのかた肩身の狭い思いで暮らしたことなんてないやろ。

宗近 まあ、それはおかげさんでな。

小野 僕は違う。僕にとって京都は、惨めな思いで暮らした街なんや。あまり帰りたいないんや。できればもう二度と。

宗近 ー。

小野 そりゃ金山さんにはホンマに世話になったよ。一生忘れん。小夜子

さんのことも本気で好きやった。一生忘れん。けどな、東京に出てきた時、これでようやく自分の、僕自身の人生いうもんを一から始められるて、そう思ったんや。何て言うたらええんかな、まるで暗い水の底からようやく浮かび上がって、やっと息ができるようになった、そんな感じや。こういう気持ち、君にはわからへんやろ。

沈黙。

宗近 続けるよ。

小野 この部屋へ初めて入った時にな。

宗近 うん。

小野 思ったわ。住む世界が違ういうんは、ああこういうことなんや、こんなあからさまなことなんやなって。

宗近 ——。

小野 僕かて東京のこんな家に生まれて、こんな部屋で思いきり勉強がしてみたかったわ。

宗近 (うなづく) そうか。

小野 あの人に初めて会った時にも思った。ニューヨークに行った時にも。この服も。全部。わからんやろうなこの感じ。自分には縁のない、遠い夢のような世界やって、今までずっとそう思ってきたもんが——けど、今は現実に自分の目の前にあって、僕のこの手が届くところにあるんや。そやから——そやから僕は——。

宗近 向こうから縁を切ると言われて、むしろこれ幸いと思ったってことか？

小野 ー。(唇を噛む)

宗近 だから恩人の見舞いにも行かないのか。

しばしあって、小野がうなずく。

宗近は「うーん」と腕を組む。

宗近 小野さあ、そいつはロックじゃないぜ。それは全然ロックじゃないよ。

小野 君にはわからへん。君には僕の気持ちなんて一生わからへんよ。

宗近 そりゃわからんよ。完全にはな。だが君の言ってることは、言っちゃ悪いが、そんなものは全部上っ面の話じゃないか。違うかい？

小野、悔しくて泣きそうになる。

小野 そうや。君からしたら全部上っ面の話やろう。けどしゃあないやんか。僕にとってはそれが大事なんやから。僕は弱い人間や。自分でもわかってるよ。けどしゃあないやんか。そういうふう生まれついてもうたんやから。

宗近 まあ待てよ。そんなふうに関き直られちゃ話が續かん。

小野 もうええて。僕のこととは放つといってくれや。

宗近 そうは行かんさ。

小野 (カツとなる) 何でや。何で君は他人の事情にそうやって首を突っ込むんやツ。

と、「もうやめてください」と消え入りそうな声がして、半開きだった応接間の戸口から小夜子が現れる。

小野はあまりの思いがけなさに息を呑む。

小夜子 宗近さん、もう結構です。どうもありがとうございます。清三さん、お久しぶりです。

小野 (信じられない) 何で——何で、小夜ちゃんがここに？

小夜子 今朝、宗近さんが京都まで訪ねて来てくれはって。

小野 え？ (と宗近を見る)

宗近 君が帰って来んから仕方なく一人で行ったんだよ、ドリーム号で。本当は無理やりにも君を引っ張ってくつもりだったんだが。

小野 君って人は、何でそこまで。

宗近 何でって、友人として放っちゃおけんさこんな話は。だからお見舞いも兼ねて、きちんとした事情を聞きに行ったんだ。浅井の話だけじゃどこまでが確かなことかわからんからな。そしたら、この人も。(と小夜子を見る)

小夜子 わたし清三さんからずっと連絡ないのが、それがもうあなたのお返事いうことなんやわって、きつとそうなんやって、半分はもうあきら

めてました。そしたらこの前浅井さんがみえて、あなたが結婚しはるいうお話聞いて——ああ、やっぱりそうなんかあ思ったけど——そんなでもやっぱり、一度あなたの口から直接聞いてみんうちは、どうしても納得できひんて思ってる自分もおつて——それで、思いきつて連れてきてもらったんです。

小野 ——そうやったんか。

小夜子、うなずく。

小野は悄然とうなだれる。

小夜子 けど、ホンマにこれでしょうか。やっぱりわたしの想像してた通りやった。

小野 ——ごめんな。(と声が震える)

小夜子 (哀しく微笑して) ううん、ええんよもう。ようわかったし。

小野 お父さんと、小夜ちゃんにはホンマに——堪忍してください。この通りです。

小野、膝を折つて小夜子の前に手をつく。

小夜子 清三さん、ホンマにもうええんよ。わたしも納得できたし。もう大丈夫やし。そやしもう、そんなんしんといってください。

宗近 まあ二人とも待てつて。

と、宗近が二人の間に割って入ったと思うと、小野の目の前にすんと
と座り込む。

宗近 小野、話はまだ終わっちゃいない。ここから真面目になるとこ
だぜ？

小野 ? 真面目に？

宗近 そうだよ。人間は年に一度くらい真面目にならなくちゃいけない場
合がある。いいかい？ 君は僕なんかよりうんと頭もいい。努力家だし、
文学的才能もある。僕は君を尊敬してる。尊敬してるから君を救いた
いんだ。

小野 救う——？

宗近 そうだよ。こういう危うい時に生まれつきをたたき直しておかない
と君、一生が台無しになるぜ？ たとえ将来検事総長や総理大臣になっ
てみせたって、もう取り返しはつかん。ここだけ小野、真面目になる
のは。

小野 ——。

宗近 (小夜子に) 小夜子さんもせつかくここまで来て小野に会えたんだ。
そんなに急いで納得せずに、まあその辺に掛けてください。ここが僕
たちみんなの正念場です。どうかもうしばらく。

小夜子 ——。

宗近 さあ。

小夜子、うなずいて少し離れて床に座る。

宗近は再び小野に向き直る。

宗近

まず誤解のないように言つとくがね、僕は何も藤尾さんとの結婚に反対しようってんじゃない。小夜子さんの前だが、君が本気でそうしたいのならすればいいと思つてる。ただね、二人の人間が結婚という生涯一大事の契約を交わす以上、それは本当に真面目なものでなくちやいかんと言つてるだけだよ。

小野

――。

宗近

いいかい。世の中には真面目がどんなものか知らずに一生済んじまう人間がゴマンといる。ハートのないやつ、ハートということがわからんやつ、そういう上っ面だけで生きてるやつは、ただ人間の形をしてるってだけの人間モドキだ。ハートがなければだが、あるのにそんなものになるのはもったいない。そうじゃないか。ええ？ それにね、真面目になったあとは心持ちがいいもんだぜ？ 嘘じゃない。自分で経験してみないうちはわからない。君には真面目になった経験があるかい？

小野、うなだれたまま、わずかに首を振る。

宗近

なければ一度なってみろよ。今だよ。こんな瞬間は生涯で二度とは

来ない。この機を逃したらもうダメだ。小野、ここだぜ？

小野
――。

宗近 僕はこの通り勉強もできん。大学も休学中だ。パン屋のバイトも昼までしかしない。あとはゴロゴロしてる。だから金もない。それでも君より平気だ。糸公は神経が鈍いからだって言う。なるほど神経も鈍いんだろう。しかしそう無神経なら、なけなしの金でわざわざ京都まで行ったりはせんよ。ほれこの通り。（とぴしゃりと自分の頬を叩いて）痛い。「切れば血も出る熱もある」だよ。人並の神経はあるつもりだぜ？ な？（と笑いかける）

小野は笑わない。宗近は前にのめるようにして続ける。

宗近

いいかい。僕が君より平気なのはね、べつに努力や勉強のおかげじゃない。ただときどき真面目になるからだよ。いや、なるからってよ、なれると自分で知ってるからかな。いざって時に俺は真面目になれる人間だ。その確信さえ自分の中にあれば、腰が据わる。心中穏やかでいられる。これは本当だぜ？

小野がゆっくり顔を上げると、宗近の顔はすぐ鼻先にある。

宗近

真面目っていうのはね君、つまりはロックってことだよ。精神のロックン・ロールだよ。自分という人間全体が活動するってことだよ。

頭の中を遺憾なく世の中にたたきつけるってことだよ。いくら口が巧くても、誰かの顔色を窺って出世しようだなんて連中は全員クソだよ。何一つ真面目じゃないよ。ジョン・レノンを見ろよ。甲野を見ろよ。

俺、今でもはつきり覚えてるけど、高二の夏にあいつ、いつか世界を幸せにしたいって言ったんだぜ？ 世界を幸せにするのが本当の大人だって。そういう大人になって、いつか自分も世界を幸せにしたいんだって。俺、それ聞いてしびれたよ。真面目ってそういうことだよ。

君もこの際一度真面目になれ。人一人真面目になると当人が助かるばかりじゃない。僕も助かる。小夜子さんも、藤尾さんも、みんな助かる。世の中が助かる。オール・ユー・ニード・イズ・ラブだ。どうだい小野、僕の言ってることは支離滅裂でわからんかね。

長い間があつて——小野がくすつと小さく笑う。

小野 いや。よくわかるよ。

宗近 真面目だぜ？

小野 真面目にわかった。ありがとう。（と真顔になる）

宗近 それで？ 君はどう思う。

小野 僕も——なってみたいと思うよ。精神のロックン・ローラーに。

宗近 なるぜ。今ならまだ。俺でよければいくらでも相談に乗る。糸公

に金を借りてもう一度京都までつき合ってもいい。

小野、居ずまいを正して宗近を真っ直ぐに見る。

小野 いや、一人で大丈夫や。

宗近 本当か？

小野 うん。いろいろありがとう。

宗近 よし。なら俺の役目はここまでだ。

宗近、立ち上がってデスクの方へと引き下がる。

小野、再び向かい合う格好となった小夜子を真っ直ぐに見る。

小野 お父さんのお具合は——どうなん？

小夜子 転移しとった分も、おかげさんで放射線が効いてだいぶようならはったけど、まだあんまり食べられへんさかい、相変わらず痩せてフラフラしてはる。

小野 そう。

小夜子 うん。

小野 明日——お見舞いに行かせてもうても構へんやろうか。

小夜子、顔を伏せる。小さくうなづく。

小野 今さら、どの口が言うとんか思うやろうけど。

小夜子 ううん。お父はんもきつと喜ばはるわ——ね、それやったら。

小野 え？

小夜子 今から一緒に帰らへん？

小野 ——ええの？

小夜子 うん——ええよ。

小野 ほなこれ着替えて行かんと。こんなん着てったらびっくりしはるわ。

小夜子 ええやん。よう似合うてるで。

小野 堪忍してえな。(苦笑)

小夜子 ふふふ。

と、ノックがあつて、志津子が入ってくる。

志津子 小野さん、そろそろまいりませうか——あら、何をしてらっしゃるの？

二人は慌てて立ち上がる。

志津子 そちらの方はどなた？

宗近 僕から紹介しましょう。京都の金山小夜子さんです。

志津子 え？まさか。

宗近 おばさん、小野は今からこの人と一緒に京都へ行くんです。恩人のお見舞いですよ。

志津子 え？だってあなた、今日はこれから大森さんのお食事会が。

小野 すみません。僕は行きません。

志津子 行きませんか。あなたは行きませんよ。それに京都ならこないだ浅井さんに行ってもらったじゃありませんか。あれだって立派にお見舞いみたいなものですよ。それを向こうは怒ってお金を突っ返してきたんですよ？ そんなあなた、こっちの好意をどぶに捨てるようなことをする人に、何であなたが今さら。

小野 僕の、生涯の恩人なんです。

志津子 そりゃまあそうかも知れないけど、でも何でよりによって今からなの？ 行くにしたって明日でいいじゃありませんか。じゃあなた藤尾のことはどうするんです？ あの子のことはどうでもいいとおっしゃるの？ ええ、それならそれでようござんす。どうあってもお行きになるってんなら、あなたとの結婚を許すわけにはいきませんかよ？

小野 ええ。それで結構です。

志津子 (動揺) ちよ、あなた自分が何言ってるかわかっているの？ ちよっと一さん、あなたでしよう。あなたが小野さんにまた何か吹き込んだんでしよう。

宗近 吹き込んだというより呼び覚ましたんです。眠っていた彼のロック魂を。

志津子 (カッとなる) 馬鹿なこと言ってるじゃありませんよッ、いったい何の恨みがあつてこんな、不真面目もたいがいになさいよッ。

と、廊下から「おばさま、どこですか？ どこにいらっしやるの？」

という緊迫した声あって、糸子が顔を出す。

糸子 あ、こつちにいらしたのね。あのねおばさま、欽吾さん、入院することになりました。

志津子 ええ？

宗近 おい、入院って？

糸子 詳しい検査は明日からだけど、どうも肺結核の疑いがあるって。

志津子 け、結核ッ？（と衝撃を受ける）

宗近 大丈夫なのか？

糸子 もちろんよ。（志津子に）おばさま安心して。結核でも今はいいお薬もたくさんあってちゃんと治る時代ですから。ただもしそうなら、このまま二ヶ月くらいの入院が必要なんですって。あたし、今から必要な物をそろえてもう一度病院に戻ります。えーと。

糸子、デスク周りから数冊の本や雑誌、ノートなどを手早くまとめ、メモと照合して「よし」とうなずくと、うろたえている志津子をふり返る。

糸子 パジャマと下着と歯ブラシは光江さんに出してもらえばいいですか？

志津子 え？ ええ、そうしてちょうだい。あの、あたしも行った方が？

糸子 いいえ、今夜はもうこれを届けるだけですから。（と近づいてその腕

に触れて)ねえどうか安心なさって。大丈夫ですから。あたしが付いて
ますから。

志津子 え、ええ、お願いね。

宗近 糸公。

糸子 何？

宗近 紹介だけしとく。京都の金山小夜子さんだ。(小夜子に)僕の妹です。
なかなか偉いやつです。

糸子と小夜子、互いに「どうも」と頭を下げる。

糸子 (宗近に)京都のって、じゃ小野さんの？

宗近 詳しいことは今夜うちで話す。早く行ってやれ。

糸子 うん。(小夜子に)じゃ、今日はごめんなさい。

糸子、慌ただしく出て行く。

志津子、立て続けの衝撃に立っていられず、よろよろと手近な椅子に
腰をおろす。

志津子 はああ、まったく、何て日だろう。

宗近、志津子に寄りそうように腰をおろす。

宗近 おばさん、悪いことは言わない。藤尾さんと小野のことはあきらめ

た方がいい。長い目で見ればそれが藤尾さんのためですよ。

志津子 ふん、何をきいた風なことを――。

と言ったものの、志津子にはもはや抗う気力もない。

そこへ廊下から藤尾が登場する。美しい紫の緞の振袖姿。

藤尾 ねえさつきから何をバタバタしてるの？ ハイヤー来てるわよ？ そ

れとも今日は出かけないの？

宗近 甲野が入院するんだ。結核の疑いがあるらしい。

藤尾 結核？（と一瞬驚くが）ふーん。でも今は大丈夫でしょ？ ちゃんとい

い葉があるって――あら、あなた。（と小夜子に気づく）

小夜子は気圧されて、小野の背に隠れるように立つ。

藤尾 （笑顔になって）何よちよっと、久しぶりー。（と手を振る）

小夜子 どうもお久しぶりです。

藤尾は作り笑顔で一同を見渡す。

藤尾 これってどういうことかしら？

宗近 （小野に）俺から言おうか。

小野 いやいい。藤尾さん、たいへん申し訳ありませんが、今日は一緒にできません。

短い間。

藤尾 あ、そ。

小野 これを最後に、二度とお目にかかることもありません。

藤尾 ー。 (さすがに笑顔が消える)

小野 今日までの僕は、まったく不真面目で、軽薄でした。反省しています。どうか許してください。

小野は深く頭を垂れる。

藤尾は再び笑顔になる。

藤尾 つまりあなたはこの方と結婚なさるわけね？ いいんじゃない？ だつてお似合いなもの。すつごく。

小野 僕は、この人とは結婚できません。

藤尾 あれ、どうしてよ。

小野 僕はこの人の心を踏みつけるような真似をしました。

藤尾 そして今あたしの心も踏みつけたのよね？

小野 ー。

藤尾 大丈夫よお。だってこの人、五年前から気持ちは変わってないって

言ってたもの。(小夜子に)ね、そう言ってたもんね？

小夜子
――。

藤尾 ほれ、ちゃんと伝言伝えたわよ？ ちよつと遅くなっちゃったけど。でもそんなことくらいで揺らぐような愛じゃないものね、あなたのは。純愛だもんね？

宗近 藤尾さんもうよせ。半分は自分で蒔いた種だ。

と、藤尾はテーブルの麦茶を宗近の顔に浴びせる。

藤尾 (冷たく)ごめんなさいね、あたしは今あの何とかって人と話してんのよ。

すると、小夜子が小野の背から進み出る。

小夜子 おっしゃる通りです。わたしの気持ちは変わっていません。わたしは、こちらの清三さんと結婚して、これからともに歩んで行きたいと思っています。

小野 小夜ちゃん――。

小夜子 だから、ごめんなさい。

小夜子、頭を下げ、藤尾をきっぱりと見返す。

今や女王の敗北は決定的となった。

藤尾は、再び精一杯の笑顔を作る。

117

藤尾 ほーら、あたしの言った通り。これでハッピーエンドで幕ってわけよね。では出番の終わった敵役は楽屋に戻りまあーす。

藤尾、そのままフランス窓まで歩き、ふり返る。

藤尾 ね、小野さん、一つだけ約束して。

小野 何でしょう。

藤尾 もしあたしがこのあと楽屋で死んでいたら、その時は必ずおっしゃってね。「埃及の御代しろし召す人の最後ぞ、かくありてこそ」って。

小野 それはできません。

藤尾 どうして？

小野 それを見つけるのは僕じゃありません。

藤尾 いいわ。ならお通夜の席でおっしゃって。あたしたち、それくらいのおつき合いはしたでしょ？

小野 ——わかりました。

藤尾 それではみなさま。

藤尾、一同の前で最高に優雅なバウをする。

藤尾 Ciao。

ディープ・パープルの『ラット・バット・ブルー』。

フランス窓から退場する藤尾を一同が見送る。

志津子がワツと顔を覆った瞬間——急速に暗転する。

3

四か月後。十一月の夜の八時過ぎ。

FENが小さく流れている。

一幕一場と同じ格好をした甲野が電話で話している。

甲野

(電話に) うん、ありがとう。もう症状そのものはないんだ。すつかり元の通りだよ。あと二ヶ月ちゃんと薬を服用してれば、それで菌が消えて完治ってことになるらしい。——そうだね、『エピタフ』の方も年明けから復刊する予定で準備してる。スタッフやライターも、この半年で優秀なのがポツポツと集まってきたしね。来年中には部数も増やして、何とか黒字に転換したいって考えてるよ。まあ宗近は絶対無理だつて言ってるけど。(笑う) え?——ああ。うん。大丈夫だよ。あいつももうすっかり落ち着いてる。来週からまたニューヨークへ行くんだなんて言ってるよ。——心配ないって、もともと本気で死のうなんて気はなかったんだから。——そうだよ、本気なら一瓶全部飲むだろう。とにかくもう気に病むなよ。あれは君のせいじゃないよ。——

うん、わかった。とにかく宗近には伝えておくよ。君も元気で。奥さんにくれぐれもご愁傷さまと。——うん、じゃあまた。

甲野、電話を切ると、飲みかけのコーヒーを持ってライティングデスクに移り、いつかのノートを開いて声に出して読む。

甲野

(読む) 「問題は無数にある。粟か米か、これは喜劇である。あの女かこの女か、これも喜劇である。綴れ織りかシユチンか。これも喜劇である。英語か独逸語か、これも喜劇である。すべてが喜劇である。普通の人が朝から晩に至って心身を労する問題は皆喜劇である。最後に一つの問題が残る。——生か死か。これが悲劇である」。

戸口から宗近がのそりと入ってくる。リボンのないよれよれのソフト帽に相変わらずのジーンズに素足、チェック柄のウール・シャツの上に放出品のハーフコートを着ている。

甲野

よお。今ちょうど小野から電話があったとこだ。金山さん亡くなったそうだよ。

宗近

そうか。(と帽子を取る)そろそろいけないとは聞いてたけどな。

甲野

先週の木曜だそうだ。葬儀は近親者で済ませたって。まあ二人でいちど線香でも上げに行こう。

宗近

うん。(コートを脱いで椅子に腰をおろす)

甲野 金山さん、最後まで君に感謝してたそうだよ。あと小野は来週からいよいよ司法修習だって。どうやら検事じゃなくて弁護士になる気みたいだな。

宗近 そうか。

宗近、ハイライトに火を点ける。何となく元気がない。

甲野 何だよ今日は。珍しいな、こんな時間に。

宗近 うん。ちよつと甲野に話したいことがあつてな。

甲野 へえ、何だい。

宗近 うん。

と、電話が鳴る。「あ、ちよつと待ってて」と言つて甲野が出る。

甲野 (電話に) ハイ、『エピタフ』編集部です。——ああ、今ちようど宗近が来たところだけど、代る?——うん——へえそりゃよかったね。——うん、わかった。伝えとく。——ありがとう。光江さんにもそう言つとくよ。え?——ああ大丈夫。さつきちゃんと飲みました。——ハイ、無理もしてません。——うん、わかつてる。ありがとう。じゃあね。(と切る)

宗近 何だよ、糸公か?

甲野 そう。薬飲み忘れてないかってしよつちゆう確認の電話くれるんだ

よ。

宗近 ふ、すっかり女房気取りだな。早く本当の嫁にしてやれよ。

甲野 兄貴のくせして乱暴なこと言うね。いいのか？

宗近 いいも何も糸公がいいならそれでいいさ。

甲野 そうそう、糸ちゃんトイレットペーパーやつと買えたって。

宗近 おお、そりやラッキー。

甲野 うちにも半分分けてくれるらしい。助かるよ。

宗近 今やスーパーはどこもかしこも修羅場だもんな。

甲野 本当だよ、まさか物質文明の現代でこんなことが現実起きようとは。テレビ観てると、まるで大正の米騒動かって思うもん。

宗近 もしかしてこれがそうなのかな。

甲野 何が。

宗近 俺たちが襟を正すべき悲劇。

甲野 いやーむしろこれこそ喜劇の最たるもんでしょ。通産省は買い占めさえしなきゃ供給量はじゅうぶんあるって言ってんだから。つまりは大衆のエゴイズムが巻き起こした壮なるスラップスティック・コメデイだよ。

宗近 おまえね、明日の朝自分の尻を拭く紙が無くなってもそうやって澄ましてられるか？ 浅ましきの点じや俺たちだってきつと五十歩百歩だぞ？

甲野 そうかな。

宗近 いざ自分の尻が拭けないとなりや、きつと慌てて誰かの紙を奪おう

とするよ。そうやって最後は、俺がおまえから奪い、おまえが俺から奪うんだ。それで何するかついていや、てめえのケツを拭くっていうただそれだけのことなのに。人間って結局、自分で思ってるよりもずっと弱かったりするんだよな。

宗近、タメ息をつく。やはりどこか元気がない。

甲野 何だよ、今日はらしくないじゃんか。渴しても盗泉の水は飲まず、糞しても奪った紙では拭かずに宗近一じゃなかったのか。いつから変節したんだよ。

宗近 そう——たぶん変節したんだと思う、俺。

甲野 だからなぜ。

宗近 藤尾さんが——あんなことしたからかな。

甲野 あんなことって、あの時の自殺未遂のことか？ でもあれ、完全に狂言自殺じゃないか。

宗近 当人は狂言のつもりでも、何かの加減で本当に死にしまうことだつてあるよ。俺さ、もし藤尾さんが死んでたら、今頃自分がどうなってたかわからない。

甲野 ——。

宗近 死なずにいてくれてよかったよ。つくづく。

宗近、煙草を消し、フランス窓から藤尾の部屋を見やる。

しばらくして手を振る。

甲野 なに手振ってたよ。

宗近 いや、今日が合った気がして。

甲野 向こうは？ 何か反応した？

宗近 カーテンを閉めた。やっぱ嫌われてんのかな。

甲野 (苦笑) まあ自分の婚約をぶち壊した張本人だからなあ。

宗近 (タメ息) やっぱそうか。参ったな。

甲野 宗近さ。

宗近 ん？

甲野 自分の入院と重なっちゃまって、いろいろバタバタしてたから今まで
言いそびれてたけど。

宗近 何？

甲野 ありがとな。

宗近 何が。

甲野 あいつのこと救ってくれてさ。

短い間。

宗近 救ったのかな、俺。

甲野 そりゃ救ったさ。あのまま小野と結婚してたらと思うとゾツとする
よ。きっと誰一人幸せにならなかったと思う。もしかしたらいちばん

救われたのが藤尾だったのかも知れん。

宗近 ー。

甲野 あいつさ、来週からまたニューヨークだってよ。しばらくは帰って来ないらしい。

宗近 へえ。しばらくってどれくらい？

甲野 本人は最低でも一年間とか言ってるけどな。女優の勉強がしたいんだと。

宗近 (驚く) 女優になるのか。

甲野 前から女優志願ではあったんだよ。一度ブルックリンのアーティストの舞台に立ったことがあってさ。しかも主役のクレオパトラの役で。

宗近 へえー。

甲野 親父に言われて、その時は俺もおふくろ連れてわざわざ向こうまで観に行つたよ。

宗近 全然知らなかった。

甲野 まーこれが惨憺たる出来だな。お客なんか途中でどんどん帰っちゃうし。で、甲野家の恥だつてんでずっと秘密になってたんだ。たしかその時の演出家があいつの恋人だよ。だからこそ抜擢されたんだろうが、その大失敗のせいであつさりふられたつてことらしい。

宗近 そうだったのか。

甲野 まあなりたきやなるがいいよ。性格的にはけっこう向いてる気もするし。

宗 近 でもそういう養成所ならこつちにもいろいろあるだろう。

甲 野 半分はニューヨーク帰りってことで箔を付けたいんだろ。そういうところは相変わらずさ。

宗 近 やっぱまだ未練があるのかな、そのアメリカ人の恋人に。

甲 野 そいつ個人への未練ってより、まあ自尊心の問題なんだろうな。いまだに心のどつかで、向こうの人間から評価されたがってるってことなんだろう。だから日本の男はさんさん見下すくせに、アメリカの男には媚びるんだよ。

宗 近 (うなづく) そうか。

甲 野 前はあいつのそういうところが無性に嫌いだったけど——何だろう、最近はこちらと哀れに思うよ。

宗 近 うん——。

甲 野 それに、考えてみりゃこつちだって同じ穴の何とかだしな。英語の歌ばっか追っかけて、日本のロックなんてまだどつかで見下してるってどこあるし。

宗 近 そうだな——。

二人はしばし思いにふける。

甲 野 ところで、俺に話って何だよ。

宗 近 ああ。うん。俺さ、来年から復学しようかと思って。

甲 野 へえ。

宗近 今までみたいにはべったり関われなくなると思うんだ。

甲野 うん、そりゃ構わないけど。何だよ、卒業して親父さんのように教師にでもなろうつてののか？

宗近 そういうんじゃない。そりゃ先のことはわかんないけど、今はただ無性に勉強がしてみたいんだ。

甲野 へえ。うん、いいことじゃないか。そうしなよ。

宗近 あとそれとさ。

甲野 うん。

宗近 最近気づいたんだけど、俺、どうも藤尾さんのことが好きみたいなんだよな。

短い間。

甲野 ?はア?

宗近 や、どうも前からずっとそうだったらしいんだよ。

甲野 (驚愕) おいちよつと待てつて。本気かそれ。

宗近 うん。すごく本気。

甲野 |。

宗近 でき、いっちょようプロポーズしてみようかと思うんだけど、どうかな。

甲野、急に万感が胸にこみ上げ——思わず宗近に駆け寄ると激しく握

手する。

宗近 え、何？

甲野 最高だよ！ 宗近、何か俺、何か俺さ。

宗近 何だよ。

甲野 今ちよつと泣きそうだよ！

宗近 何でおまえが泣くんだよ。

甲野 や、だってさ。何だろこの嬉しさは。 (とさらに両手で握り) いいじ

やないか、まさに割れ鍋に綴じ蓋だよ！

宗近 そうかな。

甲野 おう！

宗近 本当にそう思う？

甲野 思う思う！ 絶対に似合いだおまえら。

宗近 そっか。じゃ今からちよつと伝えてくるわ。

甲野 え、今から？

宗近 だって来週からニューヨークなんだろう？ (とフランス窓へ)

甲野 (慌てる) おいちよつと待てつて。今からつておまえ。もうちよつと

おまえ、何て言うかさ。

宗近 いいつて。言うだけ言ってくるよ。どっちみち向こうがイヤならそれまでつて話だし。

宗近、フランス窓を開けて出て行く。

甲野は慌ててチューナーを止め、ハラハラと見守る。

向こうの窓をノックする音。宗近の不明瞭な声がしばらくあって、やがて「はア？ 何言ってるの？ あんたバカじゃないの！」という藤尾の声が聴こえる。

甲野

(半ば呆れて) ここでは喜劇ばかり流行る。

遠くで宗近と藤尾の口論らしき声が続く。

甲野、「ククク」と笑い出し、やがてそれは哄笑となる。

レッド・ツェッペリンの『デジャ・メイク・ハー』とともに——幕。

〔原作及び引用〕

『虞美人草』夏目漱石（一九〇七）

〔参考図書・文献〕

- 『アントニーとクレオパトラ』W・シェイクスピア／福田恒存訳（一九七二）
『赤頭巾ちゃん気をつけて』四部作 庄司薫（一九七三～一九七七）
『ビートルズ●詩集』岩谷宏（一九七三）
『ドキュメント昭和五十年史』第6巻（一九七四）
『ロック訳詩集世紀末解體新書』岩谷宏（一九七五）
『岩谷宏のロック論集』岩谷宏（一九七七）
『僕って何』三田誠広（一九七七）
『みんなのライフ＆ワークカタログ』別冊宝島11（一九七八）
『メディアとしてのロックン・ロール』渋谷陽一（一九七九）
『アビイ・ロードからの裏通り』松村雄策（一九八一）
『40過ぎてからのロック』松村雄策+渋谷陽一（一九九五）
『週刊日録20世紀・第30号』講談社（一九九七）
『「おじさん」的思考』内田樹（二〇〇二）
『一九七二「はじまりのおわり」と「おわりのはじまり」』坪内祐三（二〇〇三）
『週刊昭和タイムズ・第29号』ディアゴステイニー・ジャパン（二〇〇八）
『ロックン・グ・オンの時代』橘川幸夫（二〇一六）
『「名門高校」盛衰史』別冊宝島2571（二〇一七）
『1971年の怨霊』堀井憲一郎（二〇一九）
『そのうちなんとかなるだろう』内田樹（二〇一九）